

望月町文化財調査報告書 第25集

平 石 遺 跡

— 第3次緊急発掘調査報告書 —

望 月 町
望月町教育委員会

序

ここに、平成15年度、16年度で実施しました平石遺跡の発掘調査が終了し、『平石遺跡第3次緊急発掘調査報告書』が刊行される運びとなりました。

望月町は、平成17年4月1日に、佐久市、白田町、浅科村と合併し10万人都市になりますが、望月町にとっては合併前の最後の発掘調査となりました。

平石遺跡は、過去2回の発掘調査が行われています。昭和62年度においては、日本で初めてという、石積みが行われている縄文時代の柄鏡形敷石住居址が発見され、大変大きな話題となりました。現在は、そのうちの第15号と第16号の住居址を、地主さんのご理解をいただき厳重に埋め戻し保存しており、今後の研究に大いに役立つものと思っております。

第3回目となる今回の調査では、縄文時代の住居跡がたくさん発見され集落跡が広範囲に及んでいたことが分かるとともに、貴重な土器や石器が多量に出土しました。

近年、急激な開発の波の中で失われていく文化財は増大する一方ですが、歴史を築き上げてきた先人の足跡を守り、永く後世に伝えていくことは、私たちにとっても、また、現代社会にとっても極めて重要な使命であると思います。動きの激しい社会の中にあっては、最小限度記録として保存し、また、活用することによって、現代社会に役立てていかなくてはならないと痛感している次第です。

発掘調査に際しまして、調査指導として財団法人長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センターの川崎保先生をはじめとし、調査員の皆様には熱意溢れるご指導・ご協力を賜りました。また、作業員の皆様におかれましても、体力の限界までご尽力をいただきました。さらに地主の上野泰志様におかれましては、埋蔵文化財の保護の立場で、現状変更の申し出をしてくださり、調査のご理解とご協力を賜ったことにつきまして感謝の念に堪えません。それぞれ関係された方々に対しまして、衷心より敬意と感謝の意を表する次第です。

本報告書が、記録保存の役目を担って多くの方々に利用され、郷土を再認識していただければ幸と存じ願うものであります。

平成17年2月25日

望月町長 竹花 健太郎

例 言

1. 本報告書は、平成15年9月16日～12月19日まで現地発掘調査を実施した平石遺跡第3次緊急発掘調査報告書である。
2. 本発掘調査は、個人農地の転地返しに先立って望月町が長野県埋蔵文化財センターの技術指導を受けながら実施した。
3. 調査区全体の測量は、㈱ユーアール測量設計が行い、各遺構の実測は、川崎 保・田中浩江が行った。
4. 遺構の写真撮影は、川崎 保が行い、航空写真は㈱ユーアール測量設計が行った。
5. 遺物の洗浄は市川明子・小野山鈴代・佐藤昭子・桜井けさ代が行い、注記作業は掛川喜四郎・佐藤純一郎が行った。
6. 遺物の復元・写真撮影は、第3表の遺物について実測・トレースも含めアルカ㈱が行った。
7. その他の遺物の実測・トレースは、田中浩江が行い、拓本は、掛川喜四郎・佐藤純一郎が行った。
8. 遺構のトレースは田中浩江が行った。
9. 図版の作成は川崎 保・田中浩江が行い、編集は福島邦男が行った。
10. 本書の執筆は第1章：福島邦男、第II章：田中浩江、第III章第1・2節：川崎 保、第3・4節：アルカ㈱、第IV章：川崎 保が担当し、アルカ㈱以外は文末に文責を記した。
11. 発掘調査に関わる書類・図版・写真・遺物等全ての資料は、望月町教育委員会が保管している。

本文目次

序	
例 言	
目 次	
第I章 発掘調査の経過	1
第1節 発掘調査の経過	1
第II章 遺跡の立地と環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	3
第III章 遺構と遺物	4
第1節 縄文時代の遺構と土器	4
第2節 遺構外出土の縄文土器	23
第3節 主要土器の観察表と接合痕の分析	29
第4節 縄文時代の石器と分析	32
第IV章 総括	56
写真図版	59

挿 図 目 次

第1図 夏の河川の水温	2	第5図 第11号住居跡遺構図	6
第2図 藤山黒曜石原産地遺跡群の位置	2	第6図 第11号住居跡出土土器	6
第3図 平石遺跡周辺遺跡分布図	3	第7図 第50号住居跡遺構図	6
第4図 遺構配置図	5	第8図 第50号住居跡出土土器 その1	7

第9図	第50号住居跡出土土器 その2	8	第30図	遺構外出土土器 その4	27
第10図	第51号住居跡遺構図	10	第31図	遺構外出土土器 その5	28
第11図	第51号住居跡出土土器	10	第32図	第53号住居跡出土土器 その1	40
第12図	第52号住居跡遺構図	11	第33図	第53号住居跡出土土器 その2	41
第13図	第52号住居跡出土土器	11	第34図	第53号住居跡出土土器 その3	42
第14図	第53号住居跡遺構図	13	第35図	第53・57・50・55号住居跡出土土器	43
第15図	第57号住居跡遺構図	14	第36図	第1号埋壘・第8号土坑・遺構外出土土器	44
第16図	第53・57号住居跡出土土器 その1	15	その1		44
第17図	第53・57号住居跡出土土器 その2	16	第37図	遺構外出土土器 その2	45
第18図	第53・57号住居跡出土土器 その3	17	第38図	遺構外出土土器 その3	46
第19図	第54号住居跡・第11号土坑遺構図	17	第39図	遺構外出土土器 その4	47
第20図	第54号住居跡出土土器	19	第40図	石匙の使用痕	48
第21図	第11号土坑出土土器	19	第41図	搔器と使用痕測片の使用痕	49
第22図	第55号住居跡・第5号土坑遺構図	20	第42図	打製石斧の使用痕	50
第23図	第55号住居跡出土土器	20	第43図	磨石+蔽石の低倍率観察	51
第24図	第58号住居跡・第22号土坑遺構図	21	第44図	蔽石、磨石+蔽石の低倍率観察	52
第25図	第58号住居跡出土土器	21	第45図	磨石+蔽石の低倍率観察	53
第26図	第56号住居跡遺構図	22	第46図	凹石・多孔石の低倍率観察	54
第27図	遺構外出土土器 その1	24	第47図	凹石・多孔石の低倍率観察	55
第28図	遺構外出土土器 その2	25	第48図	平石遺跡第1～3次調査遺構配置図	57
第29図	遺構外出土土器 その3	26			

表 目 次

第1表	八丁地川水系の集落遺跡地名表	3	第3表	土器観察表	29
第2表	遺構一覧表	4	第4表	石器観察表	38

写 真 目 次

写真図版1	平石遺跡遠景	第3次調査地点航空写真							
写真図版2	1:11号住	2:50号住	3:51号住	4:51号住埋壘	5:52号住	6:52号住石囲炉	7:52号住埋壘	8:53号住	
写真図版3	1:53号住石囲炉	2:53・57号住	3:53・57号住出土土器1	4:53・57号住出土土器9	5:54号住	6:11号土坑埋設土器	7:55号住	8:55・58号住	
写真図版4	1:2:58号住石囲炉	3:58号住炉内土器	4:22号土坑	5:遺構外38出土状況	6:表土割ぎ	7:作業風景	8:発掘調査団		
写真図版5	1:51号住1	2:52号住1	3:53・57号住1	4:53・57号住2	5:53・57号住3	6:53・57号住4	7:53・57号住5	8:53・57号住6	9:53・57号住7
写真図版6	1:53・57号住8	2:53・57号住9	3:53・57号住25	4:11号土坑1	5:58号住1	6:遺構外27	7:遺構外28	8:遺構外29	9:遺構外30
写真図版7	1:遺構外31	2:遺構外38	3:遺構外39	53号住剥片石器					
写真図版8	53号住剥片	遺構外・50号住・55号住石器							
写真図版9	遺構外 剥片・原石器	53号住 黒曜石原石・打製石斧・削器・礫石器							
写真図版10	その他の住居跡礫石器	磨製石斧・打製石斧							
写真図版11	礫石器								

第I章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査の経過

本発掘調査の経過は、次の流れによって実施された。

平成13年12月に地主からの申し出に基づき協議を行い、平成14年7月に補助事業計画の提出、11月に再び補助事業計画書の提出と事業内容詳細確認の提出、12月にも補助事業計画書の提出、平成15年1月には長野県教育委員会のヒアリングが行われた。3月には、調査の技術指導について、長野県教育委員会に依頼書を提出し、長野県埋蔵文化財センターの職員の配置について同月受理の認定があった。4月に補助事業の内示があり、これに基づき補助金交付申請書を提出した。5月には補助金の交付決定があり、調査員、作業員の組織等についての体制作りを行い、8月に発掘調査届けの提出、労働災害保険の手続き等を行う中、調査団会議を開催し調査の方法や手順について学習会を実施した。発掘調査は、9月に桑の木の伐採、草刈り、その後重機による表土剥ぎを行い、業者によるグリッドの設定、そして掘り込みに入った。調査の成果を11月に現地見学会で公開し、12月に現地調査を終了した。その後、遺物の処理が行われ平成16年度の整理作業に備えた。

平成16年度事業は、平成15年7月と11月に事業計画を提出し、翌年4月には内示があり同月補助金交付申請書の提出、6月に交付決定があった。9月には出土品の実測等処理の業者決定を行い、業務が開始された。平成17年1月には、補助事業の計画変更承認申請書の提出を行い、補助金の額の変更を行った。そして、平成17年2月28日の発掘調査報告書の刊行及び実績報告書の提出により全ての事業を終了するものである。

平石遺跡は、過去2回の発掘調査が行われている。1次調査は昭和62年度で、縄文時代の住居址31軒、配石遺構1基、古墳時代と見られる環状配石遺構1基と多くの遺物が出土した。中でも柄鏡形敷石住居址は、張り出し部が石積になっているという日本では初めての遺構として注目された。2次調査は平成元年度で、縄文時代の住居址18軒、土坑1基、その他柱穴等とともに多くの遺物が出土した。縄文早期の土器や中期の柄鏡形敷石住居址、土器を廃棄した住居址などが注目された。

今回の第3次調査は、農地の深掘りによる天地返しにより周知の平石遺跡が影響をうけるため、事前に発掘調査を実施し記録保存を図ったものである。

第3次発掘調査の地点は、平石遺跡の中でも保存状態の最も良い状態であるとの想定であったが、かつて深いところまで耕作等がわかり、攪乱が目立っていた。しかし、遺構はかなり深い位置に構築されていたものもあり、攪乱のをがれ良好な遺構も存在した。特に良好で天地返しや今後の耕作に影響しないものは、あえて掘り上げずには避け、できるだけ保存することに努めた。

攪乱された遺構が多い中、地中を掘り込んで構築されていた炉址や煙突は比較的良好な状態で残っており、攪乱された遺構の時期設定や構造を記録に留めることができた。

遺物は土器・石器とともに、コンテナに60個分に及ぶ予想以上の出土量があった。特に土器の出土量はおびただしく、全体の95%以上を締めていた。

これまで密度の濃い遺跡は、蓼科山北麓の縄文文化においては他に例をみず、貴重な調査の一端を担うものであった。

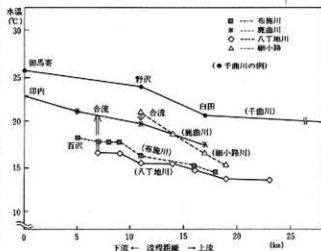
(文責 福島邦男)

第二章 遺跡の立地と環境

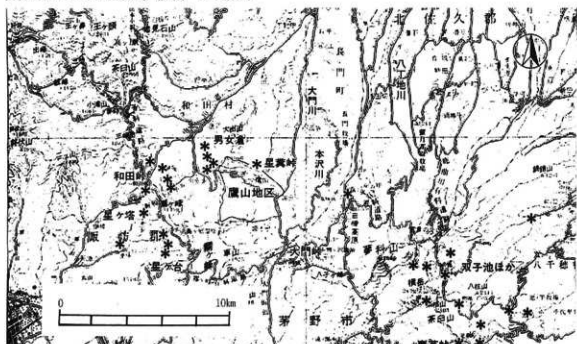
第1節 地理的環境

望月町を流れる主流河川には、布施川・鹿曲川・八丁地川・細小路の4河川が挙げられる。平石遺跡は、その4河川中の八丁地川の河岸丘上に営まれた遺跡の一つである。八丁地川は蓼科山麓の本沢・唐沢・方仁田沢の各々の湧水が合流した河川であり、およそ18km下流で鹿曲川と合流し、やがて東御市で千曲川に合流する。この八丁地川は、夏の水温が13~15℃を測り、望月町を流れる河川の中で最も低温で、地下水や湧き水に近い水温といわれる。それだけ、湧水地点の沢が蓼科山麓に深いといえるのかも知れない。ちなみに、長野県東北信の遺跡を語るときに切り離すことができない千曲川の水温は、それより約10℃高い。この水温の違いは、おそらく川に生息する魚や植物ばかりでなく、そこに集まる動物の生態に何らかの影響を与えていたのではなからうか。

また、蓼科山麓では長門町鷹山遺跡群の黒曜石採掘遺跡を中心に、黒曜石原産地遺跡群が密集することで知られるが、平石遺跡は長門町鷹山遺跡群の黒曜石採掘遺跡まで約15kmの直線距離を測り、望月町内遺跡の中では近い距離にある遺跡の一つである。今回の調査では平石遺跡から黒曜石の原石も出土しており、蓼科山麓の黒曜石原産地との関係も今後注目したいところである。(文責 田中浩江)



第1図 夏の河川の水温 (1991.8 晴天時)
1994「望月町誌 第一巻 自然編」【第4章 陸水】より



第2図 鷹山黒曜石原産地遺跡群の位置 2000「鷹山遺跡群Ⅴ」長門町教育委員会より

第2節 歴史的環境

平石遺跡は標高775～780mを測り、前にも触れたように八丁地川河岸段丘上に営まれた遺跡の一つである。この河岸段丘上には鹿曲川に合流するまでの間、遺跡番号76～80、82～89のおよそ13箇所に集落遺跡の所在が確認されており、縄文中期の遺物を出土する遺跡7箇所、縄文後期は4箇所、前期は3箇所、早期は1箇所、古墳時代は2箇所、平安時代は12箇所であり、これらの全てを包含するのは平石遺跡のみである。概観して集落の営まれた時間帯は縄文中期に集中し、蛇行を繰り返す八丁地川により段丘の肥大した箇所に縄文後期の遺跡が営まれた傾向が見て取れる。これらの遺跡は、全て左岸に分布しており、現在のところ右岸に営まれた遺跡は確認されていない。

更に八丁地川を遡上すると、川沿いの山麓に6箇所の縄文時代と平安の遺跡が確認されているが、これらの縄文時代の遺物は中期に限られていることも興味深い。(文責 田中浩江)

引用参考文献

廣山遺跡群調査団編 2000「廣山遺跡群V」長門町教育委員会

望月町誌編纂委員会編 1994「望月町誌 第一巻 自然編」『第4章 陸水 3節 河川水』

望月町教育委員会 1981「望月町遺跡群詳細分布報告書」



第3図 平石遺跡周辺遺跡分布図

遺跡番号	遺跡名	所在地 大字 小字	地目	立地	種別	縄文				弥生		古墳	奈良	平安
						早	前	中	後	晩	中			
76	鷹岩遺跡	協和 鷹岩	畑	台地			○							○
77	笹原遺跡	協和 笹原	畑	山麓										○
78	平石遺跡	協和 平石	畑	田	河岸段丘	居住	○	○	○			○		○
79	山の神A遺跡	協和 山の神	畑	田	河岸段丘			○						○
80	山の神B遺跡	協和 山の神	畑	田	河岸段丘			○	○					○
82	下吹上遺跡	協和 下吹上	畑	田	河岸段丘	居住		○	○					○
83	下吹下遺跡	協和 下吹上	畑	田	河岸段丘			○						○
84	真光寺遺跡	協和 真光寺	宅地	田	河岸段丘									○
85	高呂遺跡	協和 高呂	畑	田	河岸段丘									○
86	馬場遺跡	協和 馬場	畑	田	河岸段丘									○
87	町屋敷遺跡	協和 町屋敷	畑	田	河岸段丘									○
88	六反田遺跡	協和 六反田	畑	田	河岸段丘									○
89	大塚遺跡	協和 大塚	畑	田	河岸段丘			○	○	○				○

第1表 八丁地川水系の集落遺跡地名表 望月町教育委員会1981「望月町遺跡群詳細分布調査報告書」より

第三章 遺構と遺物

第1節 縄文時代の遺構と土器

ここでは、平石遺跡第3次調査で検出された住居跡と主な土坑と伴出した土器を紹介する。石器については、第2節を参照されたい。なお遺構の時期は中期中葉、後葉、後期前葉の3段階が認められた。なお、中期後葉は前半加曾利E1・2式をI期、それ以降の後半をII期とした。また便宜的に注記などでは、住居跡をSB、土坑をSKと略号を記入している。

なお一部略完形に復元可能な土器の実測、写真撮影、観察表作成、分析を(株)アルカに依頼した。これらの土器の詳細は第3節を参照されたい。

遺構の概略: 第3次調査では、国土座標(第Ⅷ系)に準拠した5m間隔のメッシュを設定して、簡易遺り方による調査を行った。西から東へをアルファベットで、北から南へアラビア数字でグリッドを表示している。遺構は住居跡が11号(1次調査11号と共通)、50~58号の10基、土坑が2~22号の21基が検出された(第4図)。畑の耕作などによる攪乱が著しく削平された遺構が多い。とくに住居跡は以下個別に説明するが、石囲炉、敷石の鉄平石、埴甕などが検出され、住居跡の存在が推定されるが、プランがはっきりと視認できなかったものもある。逆に遺構の保存を目的として、耕作が及ばないと考えられる部分については、掘り下げなかったので、平面形がはっきり確認できた住居跡や土坑は掘りあげていないものもある。

遺構名	グリッド	備考	遺構名	グリッド	備考
11号住	F3・F4	1次調査で検出。	8号土坑	A4・A5	埴土が散在。攪乱か。
50号住	B5・C5・B6・C6	50住→52住	9号土坑	B3・B4	
51号住	E4・F4・E5・F5	敷石住居か。	10号土坑	D4	
52号住	B5・C5・B6・C6	50住→52住	11号土坑	C4	54住に隣接。埋没土器あり。
53号住	A2・B2・A3・B3	57住→53住	12号土坑	B3・B4	
54号住	C4・C5		13号土坑	D3・E3	
55号住	C2・D2・C3・D3	55住→58住	14号土坑	E3	
56号住	C1・D1・C2・D2	58住→56住	15号土坑	F3	
57号住	A2・B2・A3・B3	57住→53住	16号土坑	D3・D4	
58号住	C2・D2・C3・D3	55住→58住	17号土坑	E3	
2号土坑	C5・C6		18号土坑	E3	
3号土坑	C5・C6	隣接して遺構外27出土。	19号土坑	C3・D3・C4・D4	19坑→6坑
4号土坑	C3		20号土坑	F3	
5号土坑	C3		21号土坑	D3	
6号土坑	C3・D3	19坑→6坑→22坑	22号土坑	D3	6坑→22坑。58住に伴うものか。
7号土坑	A4	埴土が散在。攪乱か。	23号土坑	F5	

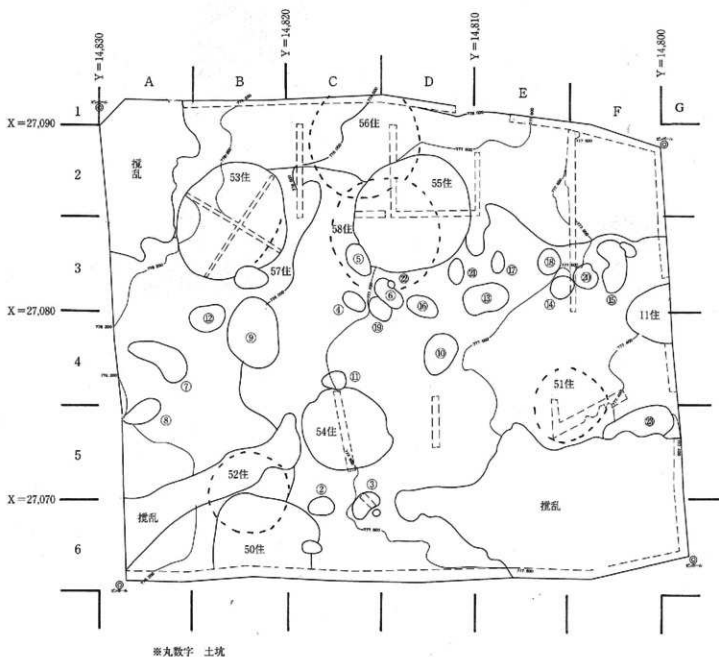
第2表 遺構一覧表

第11号住居跡(第5・6図)

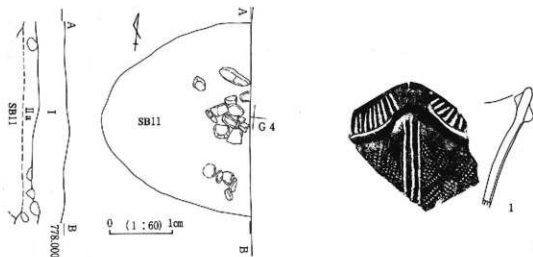
調査経過: 表土(耕作土・I層)を除去した後に、鉄平石などの平滑な石や土器がF3・F4グリッドで集中するの認められた。その周辺を面的に精査したところ、略楕円形のIIa層(黒色土)の落ち込みがIV層上面でわかった。調査区東側壁土層断面に先行トレンチを設定したところ、黒色土がIV層を切っていた。この落ち込みの東側で、第1次調査時、プランは明確ではないが、中期後半の埴甕が検出されていて、11号住居跡が設定されている。よって、この落ち込みは位置的に考えて11号住居跡の一部と考えた。構造: 長(3.4m)、幅3.0m、深さは10cm以上で、楕円形を呈すると思われる。1次調査の所見にあるように耕作による削平が著しい。覆土: 基本土層IIa層(遺物包含層)に酷似する。黒色(Hue10YR2/1)粘土質シルトで小円礫を多く含む。面的な精査および土層断面では、覆土とIIa層とを明確に区別できなかったが、



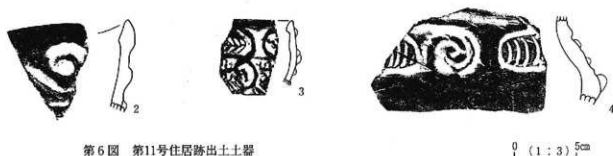
S = 1 : 200



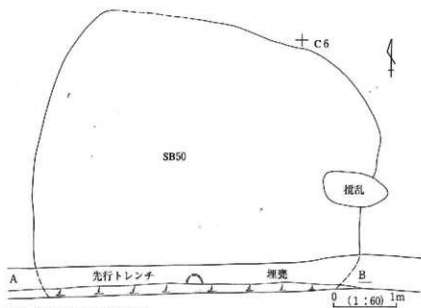
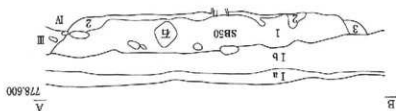
第4図 遺構配置図



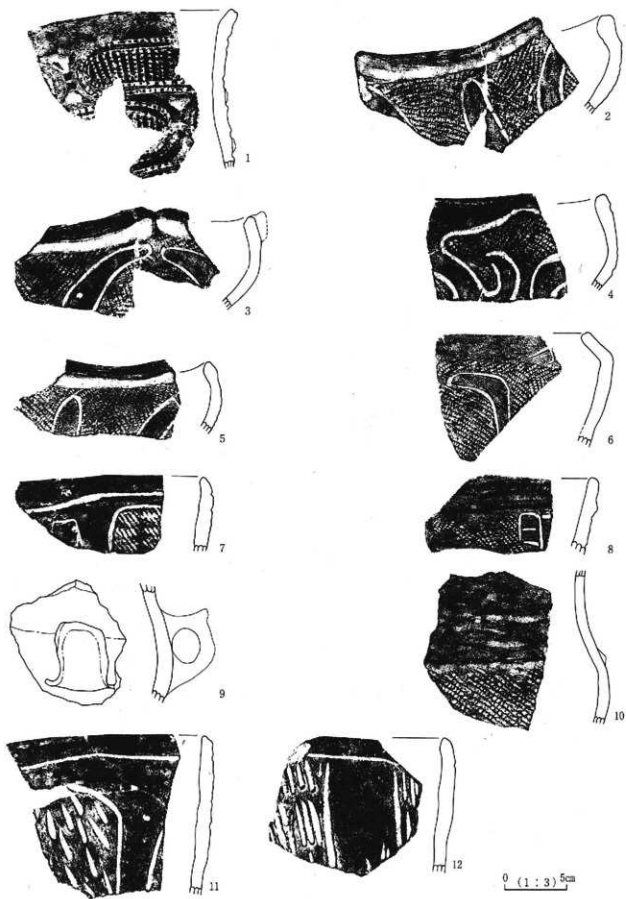
第5図 第11号住居跡遺構図



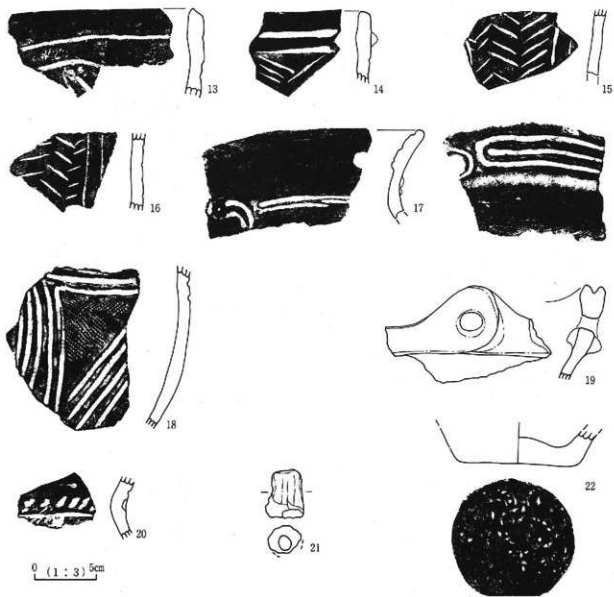
第6図 第11号住居跡出土土器



第7図 第50号住居跡遺構図



第8図 第50号住居跡出土土器 その1



第9図 第50号住居跡出土土器 その2

覆土の方が人頭大の円礫が多く含まれていた。土器：いずれも中期後葉。1～3深鉢形土器の口縁。1地紋縄文。加曾利E式系。2鱗状短沈線文土器（佐久系）。3唐草文系。4鱗状短沈線文土器の鉢形土器。

遺構の時期：中期後葉Ⅱ期。

第50号住居跡（第7～9区）

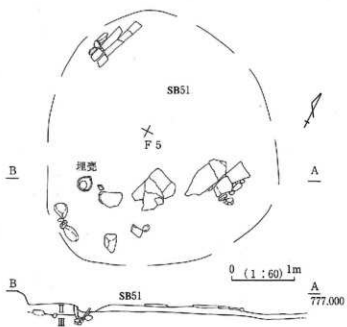
調査経過：表土除去後の精査で、歪な円形の黒色土の落ち込みが認められた。また多量の土器の出土により、住居跡の可能性があると判断し、落ち込み南側に土層観察用先行トレンチを設定した。その先行トレンチを掘り下げた結果、平面と埋設された土器（埋裏）が検出されたので、この落ち込みは住居跡の可能性が高いと判断した。**切り合い：**50号住の覆土上層から多量の中期末の土器が出土し、石囲炉と埋裏が検出された。位置的にも石囲炉と埋裏が50号住の覆土を切っているため、プランは検出できなかったが、これを52号住とした。なお、50号上層として取り上げた多量の中期末の土器は出土レベルから見て52号住にともなうものも多いと考えられるが、帰属を峻別できなかったため、注記などは変更していない。**構造：**南北（4.4）×東西5.4m、深さ0.6m。歪な円形か。50号住西側は耕作による擾乱が現地表面から1m前後と深かった。その1m前後の擾乱の下部まで重機で表土を掘削したため、50号住西側は土層断面によれば、比較的残っていたにもかかわらず、面的に掘り下げてしまったと考えられる。覆土を掘り下げているので、炉や柱穴の有無は不明。住居南側に埋設土器があるが、調査区の南壁にかかってしまい、また第50号住居跡を保存することになったため、掘り上げていない。**覆土：**1黒色（Hue7.5YR2/1）粘土質シルト、粘性強く、土器を多く含む。2褐色（Hue7.5YR4/1）粘土質シルト、粘性あり、IV層（褐色ローム）を細かく含む。3黒色（Hue7.5YR2/1）粘土質シルト、粘性あり、IV層（褐色ローム）を少し含む。覆土1層に似る。**土器：**1中期中葉。2～16中期後葉。2～10加曾利E式系。9・10壺形土器。11～16沈線縄文なのでここでは唐草文系としておく。ただし、鱗状短沈線文土器（佐久系）の系譜を引くものかもしれない。14～16鋭い原体で矢羽状の沈線が施されている。17～21後期前葉。堀内1式か。混入か。21注口土器の注口部分。**遺構の時期：**中期中葉から後葉。圧倒的に中期後葉（末）の土器が多く、中期中葉の土器の量は非常に少ないが、50号を切っている第52号住居跡が中期末と考えられるので、第50号住居跡は中期中葉に遡る可能性がある。

第51号住居跡（第10・11区）

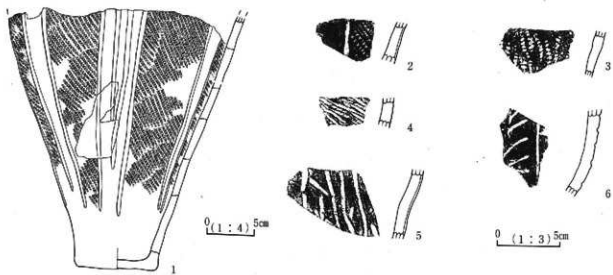
調査経過：表土除去後、Ⅱ層（遺物包含層）中を面的に掘り下げたところ、E4・F4・E5・F5グリッドで鉄平石がいくつかは同一レベルで出土した。鉄平石の広がりとは当初検出された部分と北西側に部分的にあった。検出面の層位を確認するために、先行トレンチを設定した。鉄平石はいずれもⅡ層中であつた。また鉄平石の西南端から埋裏が出土した。平面では、埋裏の掘り方は認められなかったが、断ち割ったところ鉄平石の位置あたりから、掘り込まれたことが認められたので、鉄平石にともなうものと判断した。**構造：**プランがわからないので、平面形の形状も不明。ただ、鉄平石や埋裏の配置から径4m程度はあるものと推測される。数石住居跡の残骸か。柱穴、炉跡なども不明。**覆土：**Ⅱ層中で検出された。**土器：**整理段階で所在不明。出土状況写真から埋裏は加曾利E式深鉢形土器と思われる。**遺構の時期：**中期後葉Ⅱ期。

第52号住居跡（第12・13区）

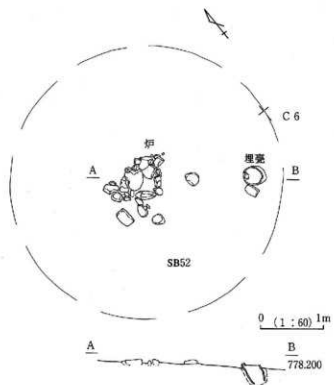
調査経過：表土除去後、Ⅱ層を掘り下げたところ、B5・B6グリッドで土器の大形破片が集中して出土し、また平たい安山岩が揃って検出された。精査したところ、石はほぼ方形に配置され、石囲炉と想定された。



第10图 第51号住居跡遺構図



第11图 第51号住居跡出土器

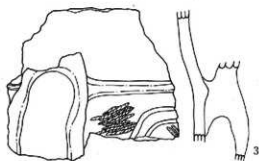
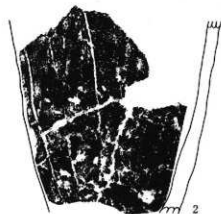


第12図 第52号住居跡遺構図



0 (1:4) 5cm

0 (1:3) 5cm



第13図 第52号住居跡出土器
(1のみ 1:4、それ以外1:3)

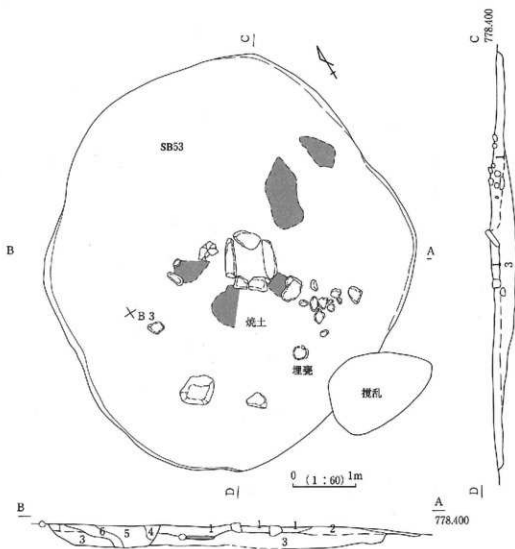
その南東部分から埋設された土器が出土した。石囲炉と埋設土器周辺の精査および先行トレンチでは、平面形および覆土は認識できなかったが、石囲炉と埋設土器の先端がほぼ同一水準で検出されたことや石囲炉周辺の土器と埋設土器がほぼ同一時期（中期末）と考えられるので、これらは同一住居跡に伴う遺物と考え、これらを第52号住居跡とし、埋設土器はこの住居跡に伴う埋塞とした。切り合い：第52号住居跡精査段階で、これよりはやや南側に竪穴住居跡と思われる黒色土の落ち込み（第50号住居跡）を認めた。第52号住居跡の先行トレンチでは52号住居跡自体の覆土は認定できなかったが、これらの石囲炉および埋塞が50号住居跡の覆土を切っているのは明白で、第52号住居跡は第50号住居跡を切っていると考えられる。構造：住居跡のプランは認められなかったが、石囲炉部分をほぼ住居跡の中心として、中期末に多い円形で、埋塞をはいるように設定すると径4.4m程度はあると思われる。直径4.4m程度か。石囲炉は1辺0.6m程度の方形。埋塞はその南東側に少し斜めの正位であった。底部は欠損。柱穴は不明。覆土：Ⅱ層中で検出された。土器：1・2唐草文系。1埋塞。3加曾利E式系の橋状把手のある壺形土器。遺構の時期：中期後葉Ⅱ期。

第53号住居跡（第14、16～18図）

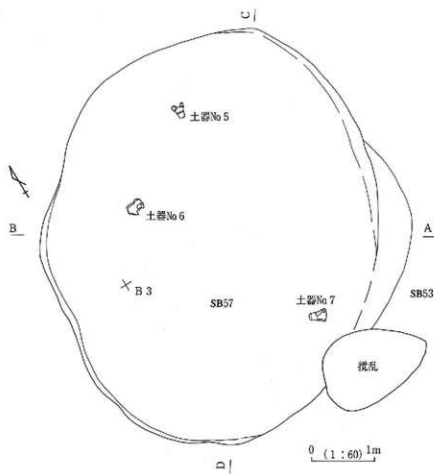
調査経過：表土除去後、Ⅱ層（遺物包含層）を面的に掘り下げていく段階で、A2・A3・B2・B3グリッドのⅢ層上面で略円形の黒色の落ち込みが認められた。そのほぼ中央に石囲炉も検出されたので、第53号住居跡とした。石囲炉を中心に先行トレンチを設定したところ、覆土がかすかに認められ、覆土の観察で平坦な部分が広がることが認められた。土層観察用ベルトを残して面的に覆土を掘り下げたところ、あまりはっきりしないが平坦面が広がることが確認された。また、石囲炉南側に正位の埋設土器が検出され、第53号住居跡のプランの中にあること、床面とはほぼ同じ水準で検出されたことから第53号住居跡に伴う埋塞と考えた。切り合い：第53号住居跡の土層観察で、かろうじて平坦面が検出された。しかし、平坦面の下位から土器が出土するので、先行トレンチを掘り下げたところ、ほぼ同じプランだが、若干東側のプランが小さい円形の落ち込み（第57号住居跡）が認められた。第53号住居跡が第57号住居跡を切る事が判明した。構造：6.4×6.0mの楕円形。主軸は北東-南西。深さは10cm内外。覆土がほとんど残っていない部分もあり、石囲炉や埋塞は露出していた。ほぼ中央に1.0×0.8mの長方形の石囲炉、主軸は北東-南西。南側に正位埋設された土器は埋塞か。ただし、炉や住居跡の主軸とは、ずれている。部分的に焼土が広がり、周辺よりやや硬い部分が存在した。床面か。柱穴は不明。プランは不明だが、土層断面の観察から、住居跡西側を落ち込み（土坑か）に切られていることがわかる。覆土：1黒褐色（Hue10YR2/2）粘土質シルト、粘性あり、軟らかい。2暗褐色（Hue10YR3/3）粘土質シルト、粘性あり、軟らかい。土器：1～24中期中葉。1～9の詳細については次項参照。18・19焼町土器。25中期後葉Ⅱ期。唐草文系土器。埋塞か。26口縁部の突起か。ただし芯棒状のものの痕跡が見られるので、あるいは土偶の一部か。27土器の胴部。やや膨らむ器形。掌状の文様が粘土紐の貼り付けで表現される。遺構の時期：第53号住居跡をかなり掘り下げた段階で、下位に第57号住居跡の存在が判明した。よって第53号住居跡から出土したと取り上げた遺物のものなかに、本来は第57号住居跡に伴うものが含まれていると考えられる。土器を観察してみると、埋塞と推定される25の土器だけが時期が新しい。よって切り合い関係を考えて第53号住居跡が中期後葉Ⅱ期、第57号住居跡が中期中葉と想定される。

第57号住居跡（第15～18図）

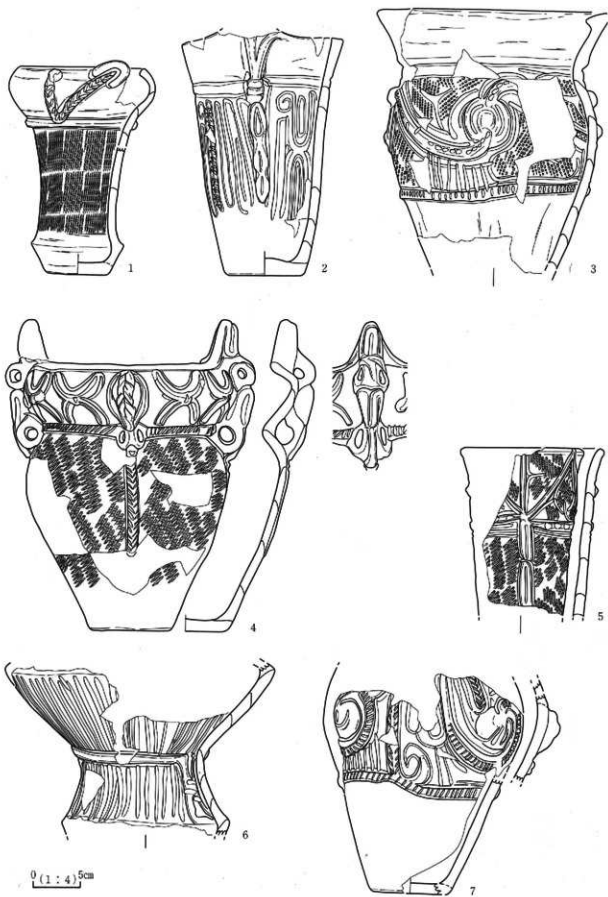
調査経過：第53号住居跡の下位から検出された。切り合い：第53号住居跡に切られる。構造：6.4×5.4mの楕円形。主軸北東-南西。上部は53号住居跡に削平されている。深さ20～30cm。炉跡、埋塞、柱穴などは不



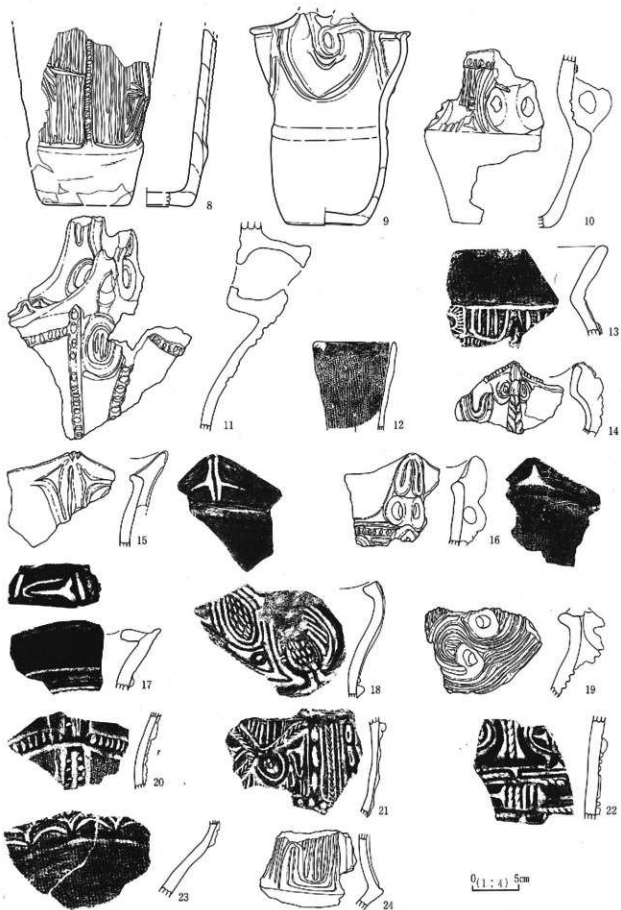
第14图 第53号住居跡遺構図



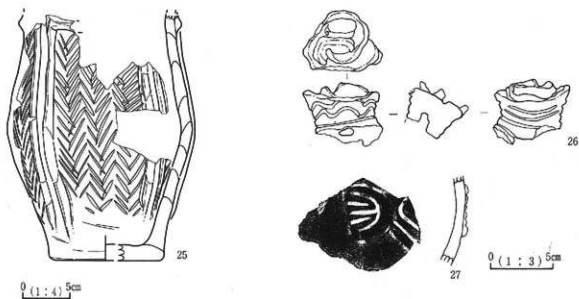
第15图 第57号住居跡遺構図



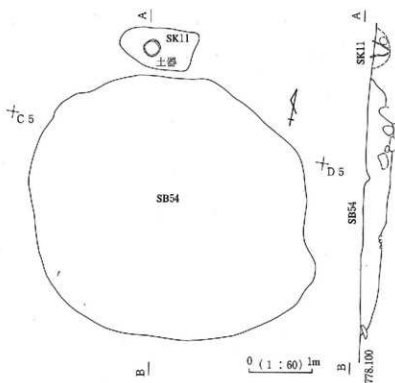
第16図 第53・57号住居跡出土土器 その1



第17図 第53・57号住居跡出土土器 その2



第18図 第53・57号住居跡出土土器 その3
(25は1:4、26・27は1:3)



第19図 第54号住居跡・第11号土坑遺構図

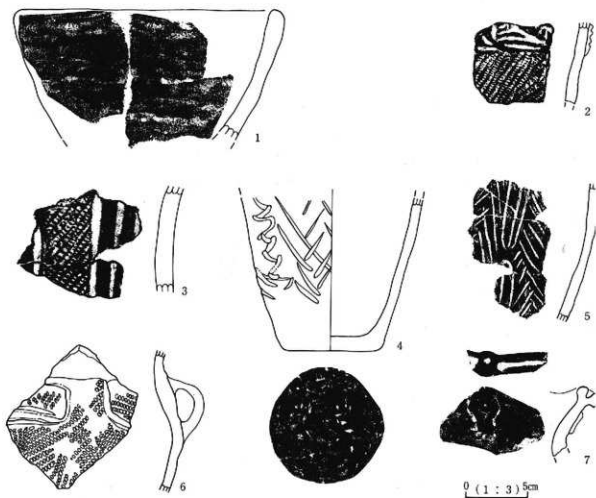
明。床面もはっきりしない。覆土：3黒褐色（Hue10YR2/3）粘土質シルト、粘性強い。53号住居土1層に酷似。以下4～6層は第53・57号住居跡を切る土坑の土層。4黒褐色（Hue10YR3/2）粘土質シルト、ブロック状に57号覆土3層を含む。5黒褐色（Hue10YR3/1）粘土質シルト、粘性あり。6灰黄褐色（Hue10YR4/2）粘土質シルト、粘性強い。土器：第53号住居跡土器の項参照。遺構の時期：中期中葉か。

第54号住居跡・第11号土坑（第19～21図）

調査経過：表土除去後、Ⅱ層（遺物包含層）中を面的に掘り下げていったところ、C4・C5・D5グリッドのⅢ層下位で、略円形径4m程度の黒色土の落ち込みが認められた。その中に土器が集中して出土したことから規模から住居跡ではないかと想定した。また、この落ち込みの北側から略完形土器の口縁部分が露出したので、この落ち込みとの関係を留意して調査した。切り合い：径4m程度の黒色土の落ち込みを第54号住居跡とし、略完形土器との関係をみるために土層観察用の先行トレンチをほぼ南北に設定した。略完形土器の方は第54号住居跡とは切りあっていないことが判明した。略完形土器は第54号住居跡の付属施設と考える根拠はないことから、別遺構とし、当初1号屋外埋壘と呼称したが、周辺の面的精査および土層断面の観察から、土坑の中に埋設された状況が認められたので、土坑自体にも第11号土坑と命名した。構造：第54号住居跡は、北西～南東の長軸5m×短軸4.2mのやや歪な楕円形。深さは、遺構検出面から0.4m。立ち上がりは北側が比較的はっきりしているが、南側は緩やかである。床面はあまり明確ではない。地山が露出した段階で床面とした。遺構保存により覆土全体を掘り下げていないため、柱穴、炉跡、埋壘などの付属施設については不明。覆土：1第54号住居跡覆土。黒色（Hue7.5YR2/1）粘土質シルト。径10cm程度の円礫を含む。しまり悪く脆い。2第11号土坑覆土。黒色（Hue7.5YR2/1）砂質シルト。しまり悪く脆い。第54号住居跡覆土に似る。土器：第54号住居跡1無文の鉢形土器。3加曾利E式。4・5唐草文系土器。4底部にかすかに網代痕。6加曾利E式の橋状把手のある壺形土器。7後期前葉壺之内式。第11号土坑1中期後葉加曾利E3式。遺構の時期：いずれも中期後葉か。

第55号住居跡・第5号土坑（第22・23図）

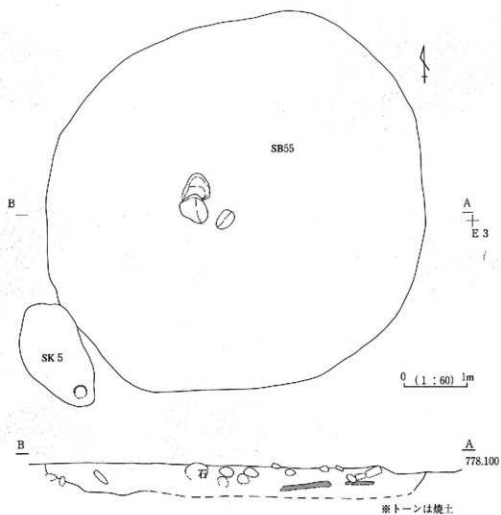
調査経過：表土除去後、Ⅱ層（遺物包含層）中を面的に掘り下げていったところ、C2・D2・C3・D3グリッドⅢ層下位で、略円形径6m程度の黒色土の落ち込みが認められた。土器の大形破片の出土や石囲炉と思われる鉄平石、落ち込みの規模から住居跡ではないかと想定した。切り合い：径6m程度の黒色土の落ち込みに土層観察用の先行トレンチをほぼ東西、南北に設定。当初第55号住居跡に伴うと判断した石囲炉は、第55号住居跡の床面からかなり浮いており、これにともなう施設ではないことが判明した。また石囲炉検出面で、その周辺からさらに鉄平石や焼土の面が検出され、このことから第55号住居跡を切る住居跡を第58号とした。周辺の精査で南西隅を5号土坑に切られていることが認められた。構造：第55号住居跡は、北東～南西の長軸6.4m×短軸6.0mのやや歪な楕円形。深さは、遺構検出面から0.5m。立ち上がりは東側と西側が比較的はっきりしているが、北側は判別しにくい。南側は全体的にかなり削平されていた。床面はあまりはっきりしておらず、地山が露出した段階で床面とした。覆土を掘り下げていないため、柱穴、炉跡、埋壘などの付属施設については不明。第5号土坑は長軸1.9×1.1mの略楕円形。覆土はほとんど削平されていた。西南隅から土器の底部が出土。規模からみて墓坑だろうか。覆土：1第55号住居跡覆土。黒褐色（Hue5YR2/1）礫混粘土質シルト。人頭大の円礫を含む。土器を多く含む。径2～3ミリの焼土粒が散在。部分的に面的に広がるものも土層断面では、認められたが、これが床面とは考えにくい。2第5号土坑覆土。土器：1～5中期後葉。1～3鱗状短紋文土器か。遺構の時期：中期後葉。



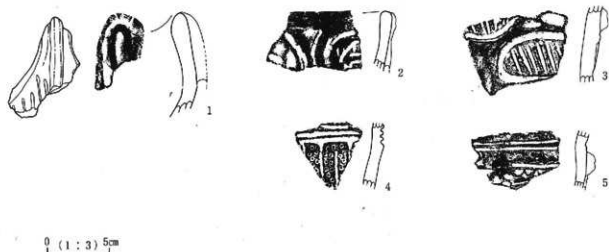
第20图 第54号住居跡出土土器



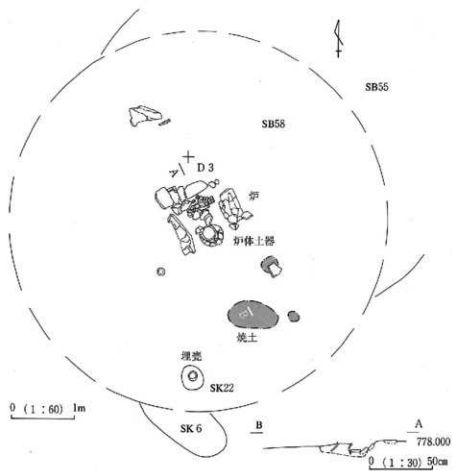
第21图 第11号土坑出土土器



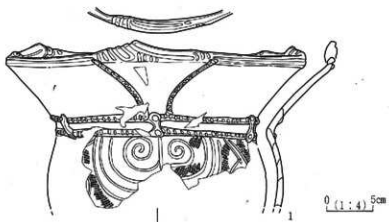
第22図 第55号住居跡・第5号土坑遺構図



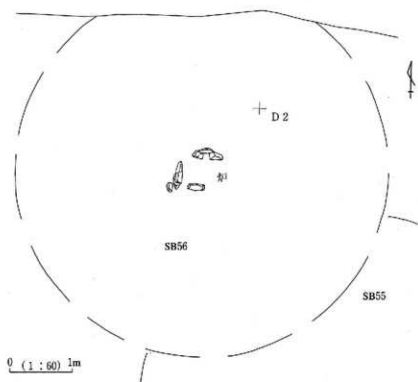
第23図 第55号住居跡出土土器



第24图 第58号住居跡・第22号土坑遺構図



第25图 第58号住居跡出土土器



第26图 第56号住居跡遺構図

第58号住居跡・第22号土坑（第24・25図）

調査経過：表土除去後、Ⅱ層（遺物包含層）中を面的に掘り下げていったところ、C2・D2・C3・D3グリッドのⅢ層下位で、略円形径6 m程度の黒色土の落ち込みが認められた。またまった土器の大形破片の出土、石囲炉と思われる鉄平石のまとまりや落ち込みの規模より住居跡と判断した。**切り合い：**第55号住居跡の先行トレンチの観察から石囲炉は第55号住居跡に伴うものではないことが判明した。同じレベルで周辺から磨石や焼土の広がりが見出され、これらを含めて第58号住居跡とした。さらに、第58号住居跡の範囲を確認するために面的に精査したところ、想定される範囲（炉を中心におおよそ半径3 m内外）に第6・22号土坑が見出された。第58号住居跡付近を精査しながら面的に少し下げたところ、これらの土坑のプランが明確化したので、第58号住居跡が切っているものと判断した。ただし、第22号土坑は第6号土坑を切ることでプランから認められ、第22号土坑土器の検出位置が第58号住居跡に伴うと考えられる遺物や床面とほぼ一致することから、あるいは第58号住居跡に伴うものかもしれない。なお第5号土坑と第58号住居跡との先後関係は、一応第58号住居跡が認識される前に検出されていたことを考えると、第5号土坑が第58号住居跡を切っていると考えた。第55号住居跡・第6号土坑→第58号住居跡・第22号土坑→第5号土坑という関係が想定される。構造：第58号住居跡の検出段階で、石囲炉はすでに露出していた。住居跡のプランは不明。覆土はほとんど残っていなかった。ただ、石囲炉とはほぼおなじ検出面で焼土の広がりが認められた。これらのはほぼ床面に相当するものと思われる。石囲炉は1.2×1.2 mの略方形。北西-南東方向が軸か。南側の炉縁石が無い。ほぼ中央に逆位の埋設土器が見出された。第22号土坑とその土器（底部のみ）はあるいは第58号住居の埋塞の残骸か。柱穴などは不明。石囲炉や周辺に鉄平石が散在することから、敷石住居の可能性もあると思われる。覆土：1 黒色粘土質シルト。Ⅱ層遺物包含層と区別がほとんどつかなかった。土器：1 後期前葉。堀之内2式の鉢形土器。石囲炉の中央から逆位で出土。遺構の時期：後期前葉。

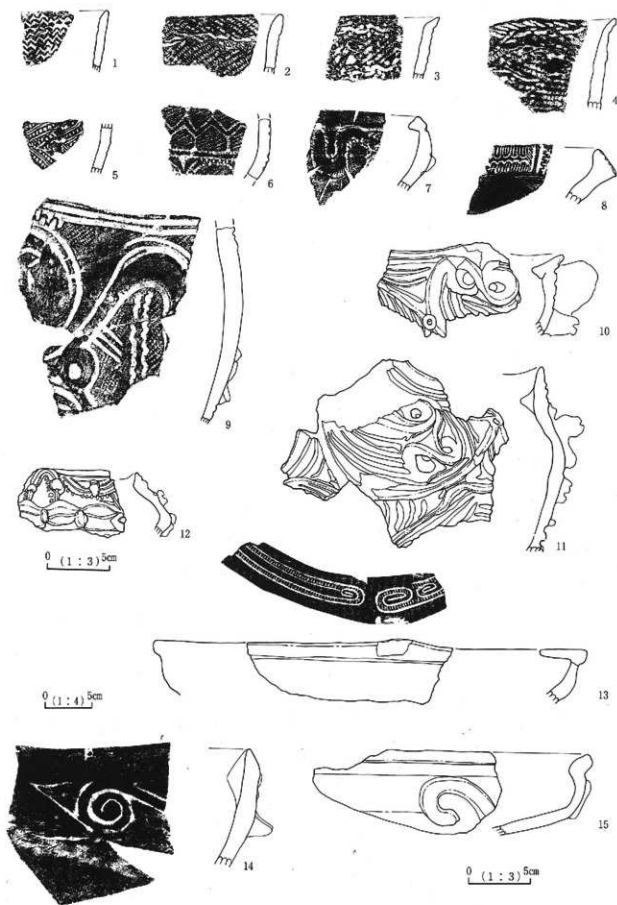
第56号住居跡（第26図）

調査経過：表土除去後、遺物包含層（Ⅱ層）中を面的に掘り下げたところ、C2グリッドで石囲炉と思われる方形の石の集中が見られた。**切り合い：**第56号住居跡自体の平面形は検出できなかった。また土層観察用の先行トレンチなどでも第56号住居跡の覆土が遺物包含層と区別できなかったため、平面形や土層断面から切り合いはわからない。ただし、隣接する第58号住居跡より石囲炉の検出面が高いことや第58号住居跡のプランより比較的高く見えたことから、第58号住居跡よりは新しいと推測した。構造：0.8×0.7 mの略方形の石囲炉。長軸はほぼ東-西方向。東側が欠損している。遺構の遺存状況はよくない。柱穴、床面、埋塞などは不明。覆土：Ⅱ層と区別できなかった。土器：遺構外27、中期後葉Ⅱ期。唐草文系土器。この土器は、第56号住居跡に伴うものかは明確にはわからないが、想定プラン内から出土している。遺構の時期：精査段階では中期後葉の土器が多く出土しているが、後期前葉の第55号住居跡を切っていることと後期に属するものと考えられる。（文責 川崎保）

第2節 遺構外出土の縄文土器（第27～31図）

1 早期の押型文土器。横位密接施文。細久保式か。2～5 前期前半。粘土に繊維を含む。2は第53号住居跡出土だが、混入と考え遺構外出土土器とした。

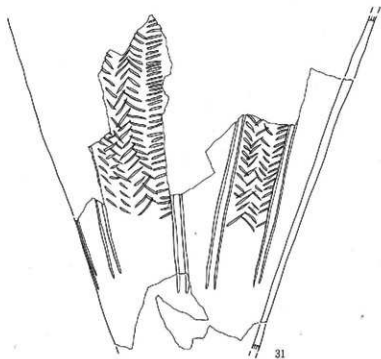
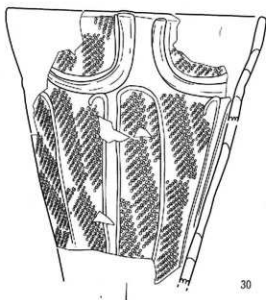
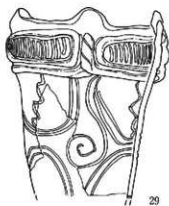
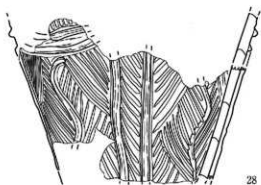
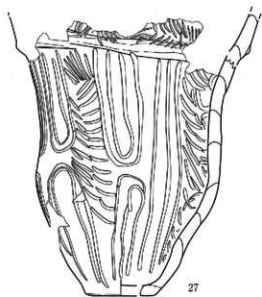
6～37 中期。6 中期初頭。地紋縄文。7～15 中期中葉。10・11 焼町土器。13～15 浅鉢・鉢形土器。16～37 中期後葉。16・17 中期後葉Ⅰ期。18 渦巻状の文様が赤彩された鉢形土器。21～23 唐草文系土器。口縁部の橋状把手。25 有孔鏢付土器。27～29 鱗状短流紋土器（佐久系土器）。30・37 加曾利E式系土器。31～36



第27回 遠構外出土土器 その1 (13のみ1:4、それ以外1:3)

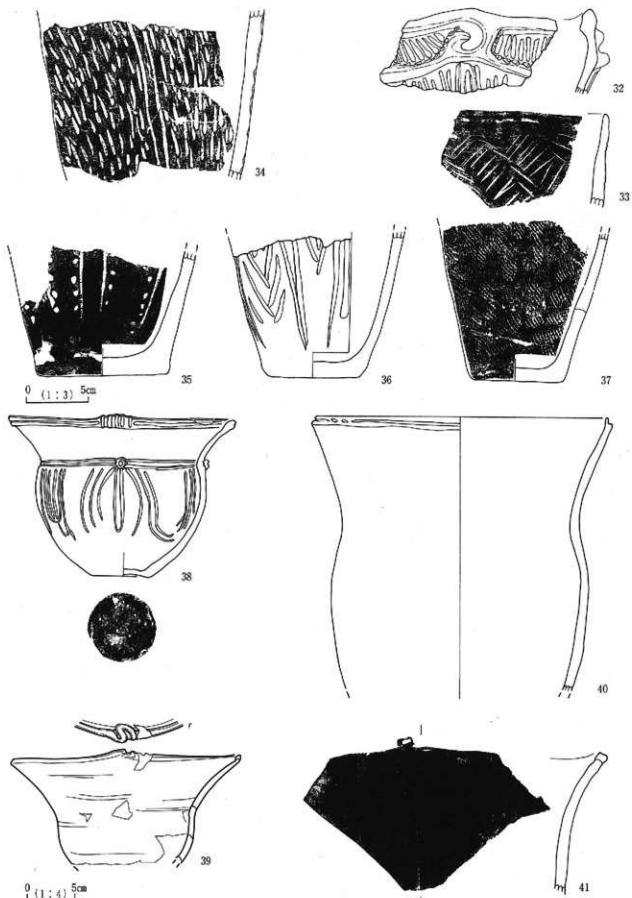


第28図 遺構外出土器 その2



0 (1:4) 5cm

第29図 遺構外出土土器 その3



第30図 遺構外出土土器 その4

唐草文系土器か。

38~45後期。38~45堀之内式期か。38・39鉢形土器。38は第54号住居跡から出土したが、38底部にかすかに網代痕が残る。42口縁に並行した隆帯状に刻目を施す。43鉢形土器の胴部破片。44注口土器の注口部。45網代痕のある底部。

46吊手土器の吊手部。中期後葉か。47口縁部の突起か。48底部。広葉樹の葉の匠痕。49ミニチュア（手づくね）土器。後期か。50匙形土製品。後期か。51土偶の胴部。中期後葉か。（文責 川崎 保）

第3節 主要土器の観察表と接合痕の分析（アルカ）

復元可能と思われる土器については、アルカに復元、実測、写真撮影、分析を依頼した（第3表）。

番号	通番	器種	出土地点 グリッド	胎土特徴	成形特徴	施文原体			文様の特徴など	法煎（単位cm）		遺物の鑑定 時期/器式	備考		
						種類	盛り	施文方向		口径	器高			底径	
52住1	11	深鉢	52住惣室	強い輝、小石混じる	輪襷みに削み取部残る	—	—	—	口縁直下に線帯隆帯 胴部横位転行沈線文、縦位横文に半沈線光潤	29.2	—	—	縄文中期末葉 後期初葉	外面に煤付着	
53・57住1	5	深鉢	覆土	白い陶粒、やや硬質	輪襷みに削み取部残る	熟赤文	L	縦	口縁部輪帯突起1単位、胴部隆帯隆帯、胴部熟赤文施文、底部張り出し形状、無文	13	22.7	6.5	縄文中期 非戸瓦Ⅲ式	内面口縁部半ばに黒化	
53・57住2	4	深鉢	覆土	砂粒、半透明粒を含む	底部接合痕顕著	—	—	—	口縁上突起1単位（欠損）、口縁部無文、胴部沈線入押圧隆帯帯下、縦位沈線文	17	25.8	8.5	縄文中期 非戸瓦Ⅲ式		
53・57住3	3	深鉢	覆土	砂粒、半透明粒を含む	輪襷みに削み取部残る	縄文	LRL	文様に沿って施文	口縁部無文、胴部内形隆帯から斜め入り隆帯が斜めに繋ぐ、沈線文・横文光潤	24.6	—	—	縄文中期 非戸瓦Ⅲ式	内面底部半ばに煤付着	
53・57住4	6	深鉢	覆土	砂粒、半透明粒を含む	輪襷みに削み取部残る	縄文	0段多糸RL	斜	口縁上に2単位突起、口縁部沈線入隆帯、隆帯帯文、胴部縦位突起4単位?削み取部、胴部削み隆帯4単位、横文光潤	33.3	17	8.5	縄文中期 非戸瓦Ⅲ式		
53・57住5	9	深鉢	覆土	砂粒、半透明粒を含む	輪襷みに削み取部残る	縄文	RL	縦?斜	口縁部に隆帯区画と三叉文、胴部隆帯隆帯、以下に沈線入り隆帯帯下、無文部横文光潤	13	—	—	縄文中期 非戸瓦Ⅲ式	内面底部半ばに煤付着	
53・57住6	13	深鉢	覆土	砂粒、半透明粒を含む	輪襷みに削み取部残る	—	—	—	胴部中半部隆、算部玉部底部縦位連続沈線、隆帯に交互刺突文	—	—	—	縄文中期 非戸瓦Ⅲ式		
53・57住7	5	深鉢	覆土	砂粒、半透明粒を含む	輪襷みに削み取部残る	—	—	—	胴部上手盛り上欠損 胴部削み隆帯帯下?弧状、4単位で突起形成、内に沈線文光潤	—	—	—	8	縄文中期 非戸瓦Ⅲ式	内面底部半ばに黒化
53・57住8	8	深鉢	覆土	砂粒、半透明粒を含む	輪襷みに削み取部残る	—	—	—	胴部上手盛り上欠損 縦位削み隆帯区画、内に沈線光潤	—	—	—	9	縄文中期 非戸瓦Ⅲ式	
53・57住9	2	深鉢	覆土	器底多く含む、硬質	輪襷みに削み取部残る	—	—	—	口縁上円環突起1単位（半欠損）、口縁部隆帯隆帯、円環状突起、胴部隆帯隆帯	17	—	8.8	縄文中期 阿玉台系、唐草系沈線器?	内面底部半ばに煤付着	
53・57住25	7	深鉢	覆土	透明粒多く含む	輪襷みに削み取部残る	—	—	—	2本1組の重下隆帯4単位、間に縦位隆帯沈線文	—	—	—	11.8	縄文中期 加賀野Ⅱ式流行	
58住10	11	鉢	58住石田村	砂粒、透明粒を含む	輪襷みに削み取部残る	縄文	LR	文様に沿って施文	3単位突起、胴部に削み隆帯と小突起、胴部隆帯沈線文に横文光潤	31.8	—	—	—	縄文後期 堀之内Ⅱ式	
11坑1	16	深鉢	S K 11	強い輝、小石混じる	輪襷みに削み取部残る	縄文	LR	縦	口縁に横位横文文、胴部仰向き隆帯沈線文区画、縄文縦位施文	—	—	—	7	縄文中期 加賀野Ⅱ式流行	
遺構外27	17	深鉢	C1G埋戻	砂粒、小石を含む	輪襷みに削み取部残る	—	—	—	隆帯により口縁部区画一単位沈線光潤 胴部縦位沈線文に半沈線光潤	—	—	—	7.3	縄文中期 加賀野Ⅱ式流行	
遺構外28	12	深鉢	C1G	砂粒多く含む、軟質	輪襷みに削み取部残る	—	—	—	口縁に二重隆帯区画、胴部縦位二重隆帯区画、縦位隆帯隆帯、横文文	—	—	—	—	縄文中期 加賀野Ⅱ式流行	底部付近黒化
遺構外30	14	深鉢	D6G	砂粒、小石混じる、軟質	輪襷みに削み取部残る	縄文	R/LR	縦	口縁に隆帯弧状文、胴部縦位沈線文区画、縄文縦位施文	27.6	—	—	—	縄文中期 加賀野Ⅱ式流行	内面底部半ばに煤付着

第3表 土器観察表



1



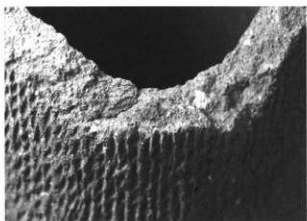
2



3



4



5



6

写真1と2は土器04の底部で、接合する。また写真3と4は土器07の底部で、同じく接合面が接合する。同じ53号住からの出土だが、04は井戸尻式、07は加曾利E3式並行で、やや時期差がある。底部の接合状態がやや異なっており、土器成形技法にも差が認められる。

写真5は土器1の積み上げ部で、写真6は土器3の積み上げ部である。いずれも井戸尻式で、53号住からの出土である。ややなだらかに山なりになる形状をしている。



7



8



9



10



11



12

写真7は土器05の胴部積み上げ痕である。また写真8は土器06の眼鏡状突起部で、粘土紐によって複雑な成形をされていることが確認出来る。共に53号住からの出土で、井戸尻式に比定される。

写真9、10は土器11の積み上げ部である。接合面に刻みが施されて、接合強化の意図がある物と思われる。後期初頭に於たる土器と推定される。

写真11、12はS K 11から出土した、土器16の積み上げ部で、内面に薄くなだらかに、接合面が広く残されている。接合上部は器面外側に貼り付けられていたことが解る。加曾利 E 3式並行の土器と推定される。

第4節 縄文時代の石器と分析

(株) アルカ 池谷勝典・高橋哲・太田圭郎

概要

平石遺跡出土石器のうち94点を図化し、分析を行った。石器の器種組成は石鏃、石鎌、削器、搔器、使用痕剥片、二次加工剥片、両極石器、石核、黒曜石原石、打製石斧、磨石・蔽石類、磨石、凹石、多孔石、石皿、砥石、石棒である。

図化外遺物の概要

黒曜石等剥片石器類

住居址、包含層等から2,902.9gが出土しているが、全体の80%にあたる2,310.3gが包含層からの出土である。住居址から出土した黒曜石は全体の14%にあたる412.3gである。住居址の中では53号住居址が191.7gと最も多く、次いで54号住居址からは124.3g、50号住居址からは56.0gが出土している。11号住居址、52号住居址、55号住居址からの出土は50gに満たない。

包含層から出土した明瞭な二次加工のなされた定形的石器は、石鏃29点と石鎌2点以外にはみられなかった。緻密石材としてはほかに珪質泥岩製スクレイパー1点が包含層から出土している。

打製石斧類

包含層等から55点が出土しているが、遺構に帰属するものはみられなかった。頁岩製が42点と最多で、次いで凝灰岩製6点、安山岩製4点、ホルンフェルス製2点、硬砂岩製1点がみられた。頁岩は凝灰岩質のものが多くみられた。

礫石器類

定形的な器種としては多孔石1点、蔽石1点、磨石1点、磨石+蔽石1点、石皿断片1点等がある。すべて安山岩製であり、多孔石が表採である以外はすべて包含層出土である。

以上のように53号住居址以外は石器組成の質量共に乏しく、包含層出土遺物についても明瞭な二次加工がなされた定形的石器はほとんど見られないという状況であった。そのため、53号住居址を中心とする図化を行うこととした。

器種組成

分析した石器について、器種ごとに分類し、下に記述する。記述は石器の製作技術とともに、使用痕分析の成果を踏まえて記述してある。使用痕を観察した石器は、石鏃を除く剥片石器51点と、打製石斧9点、それに礫石器である。

使用痕観察方法として、キーエンス社のデジタルHDマイクロスコープ(VH-7000)による低倍率ズーム(VH-Z05)と高倍率ズームレンズ(VH-Z450)を用いて高倍率の使用痕光沢の観察をおこなった。観察倍率は、5倍~40倍と450倍~1000倍(倍率はマイクロスコープでの倍率で従来の金属顕微鏡の倍率比とは異なる)である。観察面は、中性洗剤で洗浄をおこない、適宜アルコールを浸した脱脂綿で軽く拭き

取り、脂分などを取り除いた。観察範囲は、石器表面全体を詳細に観察し、使用痕光沢および線状痕の認定をおこなった。使用痕属性分類は御堂島の分類基準(1986,88)によっている。

石鏃

黒曜石製石鏃が10点出土している。凹基鏃が6点、有茎鏃が1点(遺物包含層出土)、そして3点は形態が整わず、未製品と考えられる。

凹基鏃6点は尖頭形態が三角形5点と五角形1点(50号住居跡出土)がある。石鏃の加工は、圧縮力のあるソフトハンマーの押圧剥離で整形している。

石錐

黒曜石製2点が53号住居跡から出土している。石錐の加工は、圧縮力のあるソフトハンマーの押圧剥離で整形している。使用痕観察した結果、1点に錐部先端に摩耗がみられた。光沢と線状痕は確認できなかった。

石匙

3点出土している。黒曜石、チャート、頁岩製である。黒曜石製が横形石匙で、他は縦形石匙である。握み部はハードハンマーの間接打撃、刃部は、弾力性の弱いソフトハンマーの押圧剥離で整形されている。3は、加工がみられず、微小剥離痕がみられた。

使用痕観察した結果、3点中3点に使用痕が観察できた(第40図)。表面の状況は比較的に良好である。操作方法は線状痕が平行方向から切断に使用されたと考えられる。黒曜石製石匙には光沢はみられなかった。チャート製と頁岩製には不明光沢がみられた。そのため被加工物は特定できなかった。握み部を観察したが、何かに擦れたような痕跡はみられなかった(第40図の黒曜石製石器写真3)。

搔器

黒曜石製の3点が53号住居跡から出土している。素材剥片を折取り成形している。刃部は弧状であり、径の細いハンマーで急角度の刃部を作り出している。

使用痕を観察した結果4点中3点(22,48,55)の搔器に使用痕が確認できた(第41図)。刃部に対して直交方向の線状痕が確認できた。光沢は1タイプである(No55写真1)。縁辺の摩耗度が軽微である。線状痕は刃部に対して直交方向である(No48写真1)。生皮の掻き取りに使用されたと考えられる。

削器・素刃削器

削器、素刃削器は9点出土している。黒曜石製が6点、頁岩1点、安山岩製1点と、凝灰岩製が1点である。黒曜石製削器5点は53号住居跡から出土している。他の2点は遺物包含層出土である。

黒曜石製削器40は刃部を押圧剥離で整形している。残りの黒曜石製削器は素刃削器であり、加工は様々である。23や33は刃部の反対面に押圧剥離の加工をいれ、刃を潰している。それ以外はハードハンマーの直接打撃で加工をいれている。ハードハンマーの加工がみられる素刃削器は、素材、形態から使用痕剥片との区分が難しく、両者の違いは刃部以外に加工があるかないかの差である。

43は凝灰岩製で、直接打撃打撃で加工し、刃部を押圧剥離で整形している。91は安山岩製の扁平礫の鋭い側面に直接打撃で刃部を整形している。左側面が欠損しており、刃幅等は不明である。刃角は、48~50度である。刃部の摩耗等、明瞭な使用痕は観察されない。94は頁岩製で、素材打面は折れている。素材末端部分に押圧剥離で鋸歯の加工をいれている。

使用痕観察した結果6点中3点(第41図No40写真1)に使用痕が確認できた。平行方向の線状痕がみられ、光沢はみられなかったため被加工物は不明である。

使用痕剥片

平石遺跡の特徴的な石器であり、11点すべてが黒曜石製である。縦長あるいは横長剥片を素材とし、ハードハンマーの直接打撃で素材を剥離している。素材に加工はみられず、鋭い縁辺に微小剥離痕が密集している。

使用痕観察した結果11点中5点(第41図No18)に使用痕が確認できた。刃部に対して平行方向と直交方向の線状痕が観察できた。光沢はみられない。石器が薄く、刃部は硬い被加工物に耐えられない。光沢が形成されないことから、肉や皮などの柔らかい被加工物が考えられる。

石器が非常に小形であり、着柄の痕跡を観察するため、石器の表面を観察した。背面縁上に摩耗がみられ刃部反対辺線状痕の密度が低い(No18写真1)。背面刃部側と裏面は一樣に高密度の線状痕がランダムにみられた(No18写真2,3)。柄に装着した場合、表面の線状痕の分布密度に違いが生じるが、観察した結果装着を示す痕跡は確認できなかった。

こうした使用痕剥片は、長野県や山梨県でみられ、縄文時代中期、長野県木曾谷の板敷野遺跡でも同様の石器と使用痕が確認されている(高橋2003)。

両極石器・両極剥片

黒曜石製6点である。ハードハンマーの垂直打撃で加工されている。使用痕は確認できないことから、石鏃など石器素材をとるための石核としての役割が考えられる。

二次加工剥片・剥片・石器断片

16,26,29,55は二次加工剥片である。折取加工や押し剥離がみられるが、器種を特定できなかった。50は背面にハードハンマーの直接打撃がみられ、かつ主要剥離面に切られており石核を成形した石核成形剥片と考えられる。30,32は石器断片である。21,50,54は剥片でハードハンマーの直接打撃で剥片がとられている。

石核・原石

石核は6点である。53号住居跡から5点、55号住居跡から1点出土している。非常に小形の石核であり、手で保持しての剥離は不可能である。43は縁辺に微小剥離痕がみられたが、使用痕は検出できなかった。石核が小形であることを考慮して、石核固定に関わる微小剥離痕と考えられる。剥離技術は平坦面からハードハンマーの直接打撃で素材剥片を剥離している。

原石は53号住居跡から1点出土している。縦長の扁平形態を呈し、最大長7cm弱と小形である。出土した石核や剥片、石器を考えると、遺跡内に小形の原石が持ち込まれたと考えられる。

打製石斧

頁岩系の堆積岩が9点、硬砂岩2点、ホルンフェルス1点の計12点である。50号住居跡から1点、53号住居跡から1点、遺物包含層から10点出土している。

打製石斧は、両側面をハードハンマーの直接打撃で整形加工している。

打製石斧は、規格と刃部の特徴から、大形と小形の2つに分かれる。

大形の打製石斧は形態が短冊形を呈している(第42図68など)。素材の両面に自然面もしくは節理面がみられ、摩耗が発達している。素材を選択する際に扁平な素材を選択した可能性がある。刃部は両面加工である。低倍率観察の結果、刃部の摩耗が内側にまで伸びる。石器の片面に特に強い摩耗がみられ、別の面には微小剥離痕が顕著であった。この磨耗はいわゆる「土ずれ痕」と考えられる。線状痕が直交方向である。以上から横斧状に装着され、鏃に様に使用されたと考えられる。

小形の打製石斧は、形態がバチ形を呈する(第42図No69など)。刃部が弧状で、片面が平坦であり掻器状の刃部形態である。刃部に摩耗がみられるが、大形打製石斧のように内側には広がらず、刃部の狭い範囲に限定される。大形打製石斧とは異なり、小形打製石斧は掻器のように使用された可能性が高い。

東北地方の縄文時代前期・中期の匏状石器には、使用痕分析の結果皮加工に使用されていることが報告されている(高橋2002)。匏状石器は掻器と共存しており、同一遺跡内で掻器と匏状石器が使い分けられていた可能性がある。平石遺跡の打製石斧が掻器の機能を有する可能性があり、掻器との関係が今後注目されると考えられる。

上記以外の打製石斧で、62がある。硬砂岩製でハードハンマーの加工がみられる。さらに縁辺に敲きの痕跡がみられる。

磨製石斧

5点である。すべて遺物包含層から出土している。

4点は蛇紋岩製定角式磨製石斧である。70は破損している。71は刃部が破損し、内側にまで衝撃剝離がみられる。その後、石斧は刃部再生され、石器表面に加工と研磨の痕跡がみられる。そして最後に、刃部にハードハンマーの直接打撃で加工し、打製石斧状の刃部になっている。73は石斧が破損した後、左辺の表裏と、刃部右側辺、折面に敲打整形を加えている。74は敲打と研磨で整形されているが、その後広い範囲に敲打整形を加えて、再加工している。この蛇紋岩は遺跡近辺で採集できる石材でないことから、希少価値が高い石材である。70の破損が進み原形をとどめていない石斧を除けば、3点の石斧には何らかの再加工痕がみられ、平石遺跡において長期に渡り使われていたと考えられる。

72は、上記2点の石斧と比較して、研磨面が粗いことと、石斧側面が敲打整形の痕跡が残されている。明らかに定角式磨製石斧とは異なる。形態は類似しているが、加工技術は異なり、定角式磨製石斧を複製した石斧と考えられる。

敲石

77は安山岩製の楕円礫を素材としている。正面側のほぼ中心部にならだかにくぼむ凹痕が形成されている(第44図)。裏面側の凹痕は、正面側とは様相が違い、長軸方向に凹痕が一ずつならんだものである。両側面には、裏面側と同じように長軸方向に凹痕がならぶものである(第44図)。

79は安山岩製の直角礫を素材としている。下端部に敲打痕が顕著みられる。被熱資料である。

88は扁平な長細い直角礫を素材としている。正面側の中心よりも上端よりに弱い敲打痕が観察される。被熱によりケール状の付着物が観察される。

90は安山岩製の楕円礫を素材としている。主面には長軸方向に上下一対の敲打痕の集中が形成されている。裏面側は、敲打痕の程度が弱いとその分布範囲は正面側と同じである。

磨石+敲石

75は安山岩製の比較的小型の楕円礫を素材としている。正面側のみに弱い敲打痕の集中が見られる。表面の風化が激しいか正面側には磨面も形成されていたようである。

76は安山岩製の楕円礫を素材としている。主面部に顕著な磨面と上下一対の敲打痕の集中範囲が見られる(第44図)。正面側の磨面は、石器の短軸方向に線状痕がわずかに観察される。両側面には、ザラザラする細長い平坦面が形成されおり、そのザラザラの機能面は特殊磨石の機能面と同じ様相である(第44図)。

86は安山岩製の長楕円礫を素材としている。正面側に顕著な磨面が形成されており、線状痕は短軸方向

に観察される(第45図)。上下端部には、剥離をともなうやや激しい敲打痕が形成されている(第45図-1)。両側辺と裏面側には、76で観察されたようなザラザラの機能面が形成されている(第45図)。

85は安山岩製の楕円礫を素材としている。正面側に顕著な磨面と上下一対の敲打痕の集中範囲が見られる(第43図)。敲打痕の集中範囲が短軸方向に広がっているのが特徴的である。正面側の磨面には、短軸方向の線状痕が観察される。裏面側は、わずかであるが敲打痕の集中が観察される。

磨石

83は安山岩製の楕円礫を素材としている。主面部に磨面が形成されている。被熱資料で表面風化が激しいため磨面は不明瞭である。

凹石

87は安山岩製の楕円礫を素材としている。正面側に楕円形にくぼむ凹痕を作出している。なだらかな底の部分で摩耗しているのが観察できる。被熱資料である(第46図)。

多孔石

82は安山岩製の楕円礫を素材としている。正面側に凹痕が数個作出されている。凹痕の周辺部には敲打痕も若干観察される。

84は安山岩製の中型(人頭大よりも少し小さい程度)の楕円礫を素材としている。正面側に凹痕が集中的に作出されている。側面にも一つか二つ程度、凹痕が作出されている(第47図)。

92は安山岩製の角礫の主面部に多数の凹痕が作出されている。正面側の凹痕の規模は、凹痕の直径が12~15mmの範囲のものであり、裏面側の凹痕は20~25mmの範囲のものである。表裏で凹痕の規模が違う点が興味深い。凹痕の内側は、摩耗、線状痕等の使用痕は観察されない。凹痕の成因は不明である(第46図)。

剛器

91は安山岩製の扁平礫の鋭い側辺に直接打撃で刃部を整形している。左側辺が欠損しており、刃幅等は不明である。刃角は、48~50度である。刃部の摩耗等、明瞭な使用痕は観察されない。

軽石製砥石

78は軽石製のもので、一部に平坦面を持ち何らかのものを研いだ痕跡と推定される。

台石

80は安山岩製の扁平楕円礫を素材としている。素材礫のほぼ中央部に敲打痕の集中が観察される。

81は安山岩製の扁平亜角礫を素材としている。正面側の平坦面がよく摩耗している。摩耗の成因は不明であるが、石皿のように磨面は観察されない。

石皿

89は砂岩製の扁平礫を素材としている。断片資料であるが、表裏面が顕著に磨りくぼんでいる。磨面の状況は、写真1のように均一な網目状の表面状態をしている。50mmほどあった厚みが中央部の磨面の顕著な部分では16mm程度まで摩滅しており、かなり長期間使用されたことが推定される(第47図)。被熱資料である。

石棒

遺物包含層から1点出土している。緑泥片岩を素材とし、素材礫に敲打と研磨の痕跡がみられた。

53号住居跡出土石器の検討

平石遺跡では、53号住居跡からまともな石器が出土している。住居は出土した土器型式から井戸尻式の段階に帰属する。その石器組成は石鏃未製品3点、石鏃2点、搔器3点、削器7点、使用痕剥片11点、両極石器6点、二次加工石器・剥片類9点、石核5点、原石1点、打製石斧(小形打製石斧)1点、敲石1点、台石2点、砥石1点が出土している。82の多孔石は、53と57号住居帰属と、明確な遺構出土でない。一般に多孔石は縄文中期加曾利E4古段階から信州で確認されることから、この多孔石は57号住居に帰属するものと考えられる。黒曜石製石核・原石、両極石器、剥片、断片の大半はこの住居出土であり、黒曜石製石器を住居内で製作していた可能性が非常に高い。そして使用した石器は使用痕剥片、削器、搔器であり、いずれも小形の石器である。推定される被加工物は肉や皮といったものであり、工具や植物質に対して使用された道具はみられなかった。掻き取りの道具は、搔器と打製石斧がある。同じ操作方法の道具が同一住居で共存することが確認できた。

まとめ

平石遺跡の石器は、石鏃、石鏃、削器、搔器、使用痕剥片、二次加工剥片、両極石器、石核、打製石斧、磨石・敲石類、磨石、凹石、多孔石、石皿、砥石、黒曜石原石で構成されている。そして53号住居跡からまともな石器が出土している。使用痕剥片、削器、搔器、原石、石核、剥片、断片、両極石器、礫石器が確認されている。打製石斧や磨製石斧は遺構外の出土である。

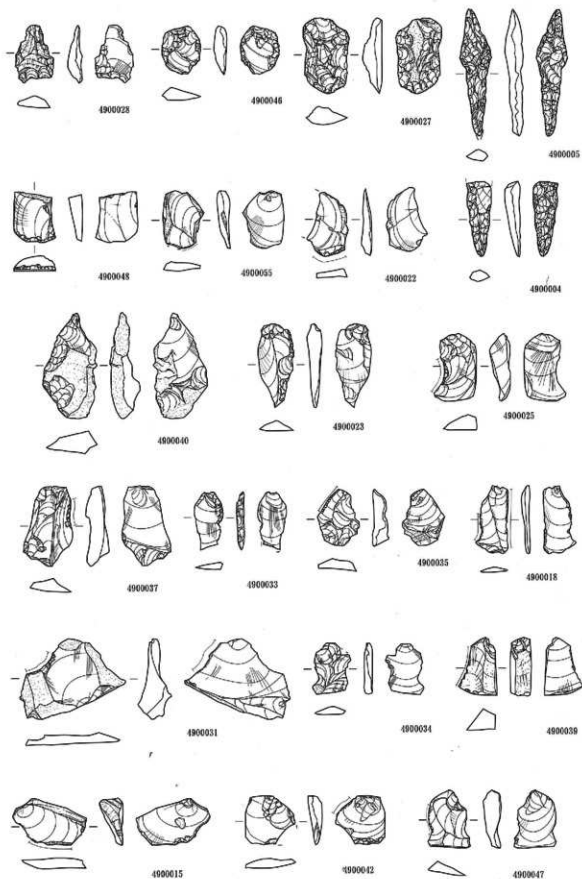
- ・原石、石核、両極石器、剥片から住居内で石器が製作されている。その剥離技術はハードハンマーの直接打撃や垂直打撃と考えられる。
- ・蛇紋岩製定角式磨製石斧はすべて何らかの再加工の痕跡が確認できた。稀少価値の高い石材は遺跡内で何度も再生され使用されていることが明らかになった。
- ・使用痕観察から、骨や角、植物に関わる光沢は検出されず、肉や皮といった被加工物に対して使用された痕跡が確認できた。
- ・打製石斧は2種類に区分でき、それぞれ使用方法が異なる見通しがついた。小形石斧は、使用痕の特徴から搔器のように使用されたと考えられる。53号住居から、小形打製石斧と、黒曜石製搔器が共存しており、2種類の搔器が使われていたと考えられる。

参考文献

- 高橋哲 2002 「中川原C遺跡」【中川原C遺跡・立泉川遺跡】山形県歴史文化財センター
- 2003 「石器の使用痕分析」【板敷野遺跡】 pp.194-206
- 御堂島正 1986 「黒曜石製石器の使用痕—ポリッシュに関する実験的研究—」【神奈川考古】22 pp.51-77
- 1988 「使用痕と石材—チャート、サスカイト、凝灰岩に形成されるポリッシュ—」【考古学雑誌】74-2 pp.1-28

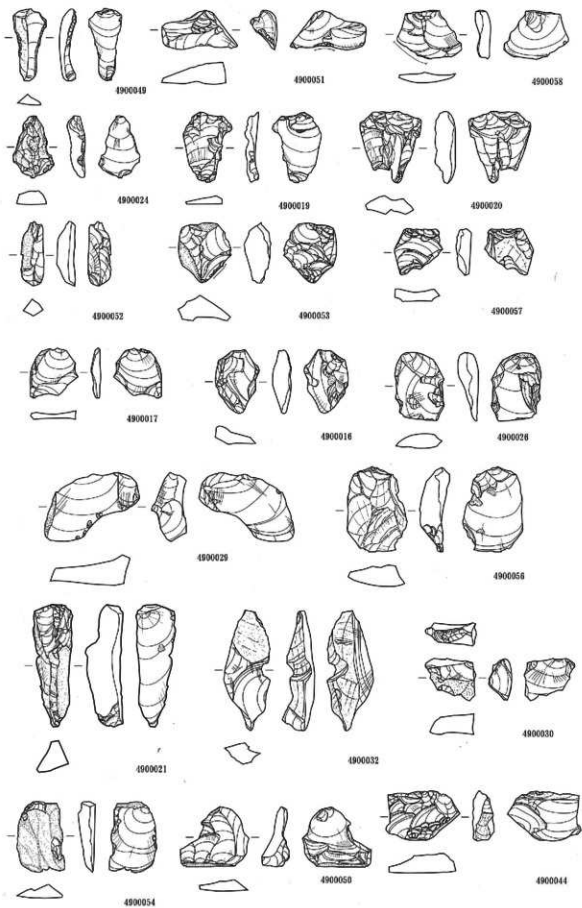
アルカ 通番	建 物	特 徴	材 質	新築時期	新築工種	新築工種 加工	打 割	劣化率	所 見	幅寸 (mm)	軸 (mm)	縦状 位置	縦状 位置	縦状 位置
1	15MH1	50住	黒曜石 SP	SP	SP	SP	不明	不明	不明	24.6	34.6	11.0	5.0	なし
2	15MH1	50住	黒曜石 SP	SP	SP	SP	不明	不明	不明	52.8	37.3	10.5	20.0	不明
3	15MH1	50住	黒曜石 SP	SP	SP	SP	不明	不明	不明	62.3	48.3	13.2	28.7	不明
4	15MH1	50住	黒曜石 SP	SP	SP	SP	不明	不明	不明	29.7	9.9	6.4	1.4	なし
5	15MH1	50住	黒曜石 SP	SP	SP	SP	不明	不明	不明	50.2	12.6	7.5	2.8	なし
6	15MH1	50住	黒曜石 SP	SP	SP	SP	不明	不明	不明	19.8	16.8	6.4	1.3	なし
7	15MH1	50住	黒曜石 SP	SP	SP	SP	不明	不明	不明	15.1	10.8	3.1	0.3	なし
8	15MH1	50住	黒曜石 SP	SP	SP	SP	不明	不明	不明	28.7	10.1	6.0	1.4	なし
9	15MH1	50住	黒曜石 SP	SP	SP	SP	不明	不明	不明	17.7	12.8	3.4	0.5	なし
10	15MH1	50住	黒曜石 SP	SP	SP	SP	不明	不明	不明	29.5	11.4	3.9	0.7	なし
11	15MH1	50住	黒曜石 SP	SP	SP	SP	不明	不明	不明	25.7	18.0	3.9	1.0	なし
12	15MH1	50住	黒曜石 SP	SP	SP	SP	不明	不明	不明	23.2	16.1	3.4	0.7	なし
13	15MH1	50住	黒曜石 SP	SP	SP	SP	不明	不明	不明	10.0	21.0	5.6	0.8	なし
14	15MH1	50住	黒曜石 SP	SP	SP	SP	不明	不明	不明	38.4	17.5	8.4	3.3	なし
15	15MH1	50住	黒曜石 SP	SP	SP	SP	不明	不明	不明	18.7	29.3	9.5	3.1	なし
16	15MH1	50住	黒曜石 SP	SP	SP	SP	不明	不明	不明	25.3	17.5	7.6	1.9	なし
17	15MH1	50住	黒曜石 SP	SP	SP	SP	不明	不明	不明	19.9	19.0	4.1	1.2	なし
18	15MH1	50住	黒曜石 SP	SP	SP	SP	不明	不明	不明	26.9	13.0	3.7	0.8	なし
19	15MH1	50住	黒曜石 SP	SP	SP	SP	不明	不明	不明	27.9	19.5	5.6	1.8	なし
20	15MH1	50住	黒曜石 SP	SP	SP	SP	不明	不明	不明	28.4	24.6	8.4	4.5	なし
21	15MH1	50住	黒曜石 SP	SP	SP	SP	不明	不明	不明	48.6	15.7	15.0	7.9	なし
22	15MH1	50住	黒曜石 SP	SP	SP	SP	不明	不明	不明	34.0	16.9	4.0	1.1	なし
23	15MH1	50住	黒曜石 SP	SP	SP	SP	不明	不明	不明	23.1	14.3	6.4	2.0	なし
24	15MH1	50住	黒曜石 SP	SP	SP	SP	不明	不明	不明	24.5	16.5	7.4	2.2	なし
25	15MH1	50住	黒曜石 SP	SP	SP	SP	不明	不明	不明	26.8	17.0	8.4	3.7	なし
26	15MH1	50住	黒曜石 SP	SP	SP	SP	不明	不明	不明	27.1	18.7	8.5	3.5	なし
27	15MH1	50住	黒曜石 SP	SP	SP	SP	不明	不明	不明	30.0	18.4	8.1	3.7	なし
28	15MH1	50住	黒曜石 SP	SP	SP	SP	不明	不明	不明	22.9	15.2	6.0	1.4	なし
29	15MH1	50住	黒曜石 SP	SP	SP	SP	不明	不明	不明	27.3	37.5	13.8	9.0	なし
30	15MH1	50住	黒曜石 SP	SP	SP	SP	不明	不明	不明	16.8	20.2	9.1	2.4	なし
31	15MH1	50住	黒曜石 SP	SP	SP	SP	不明	不明	不明	32.1	41.9	13.4	8.1	なし
32	15MH1	50住	黒曜石 SP	SP	SP	SP	不明	不明	不明	47.7	18.3	12.6	6.5	なし
33	15MH1	50住	黒曜石 SP	SP	SP	SP	不明	不明	不明	22.9	11.6	3.6	0.7	なし
34	15MH1	50住	黒曜石 SP	SP	SP	SP	不明	不明	不明	20.2	15.2	3.6	1.0	なし
35	15MH1	50住	黒曜石 SP	SP	SP	SP	不明	不明	不明	22.5	16.8	6.7	1.5	なし
36	15MH1	50住	黒曜石 SP	SP	SP	SP	不明	不明	不明	24.5	25.2	9.8	5.0	なし
37	15MH1	50住	黒曜石 SP	SP	SP	SP	不明	不明	不明	31.7	19.6	9.4	3.5	なし
38	15MH1	50住	黒曜石 SP	SP	SP	SP	不明	不明	不明	07.9	20.8	11.2	3.6	なし
39	15MH1	50住	黒曜石 SP	SP	SP	SP	不明	不明	不明	42.0	13.2	8.7	2.8	なし
40	15MH1	50住	黒曜石 SP	SP	SP	SP	不明	不明	不明	25.0	21.5	12.9	5.9	なし
41	15MH1	50住	黒曜石 SP	SP	SP	SP	不明	不明	不明	24.8	22.4	9.3	4.2	なし
42	15MH1	50住	黒曜石 SP	SP	SP	SP	不明	不明	不明	19.4	20.0	5.8	1.8	なし
43	15MH1	50住	黒曜石 SP	SP	SP	SP	不明	不明	不明	19.3	27.9	8.9	3.4	なし
44	15MH1	50住	黒曜石 SP	SP	SP	SP	不明	不明	不明	19.8	29.3	8.7	4.9	なし
45	15MH1	50住	黒曜石 SP	SP	SP	SP	不明	不明	不明	18.1	18.3	8.6	2.7	なし
46	15MH1	50住	黒曜石 SP	SP	SP	SP	不明	不明	不明	19.2	13.5	5.4	1.4	なし
47	15MH1	50住	黒曜石 SP	SP	SP	SP	不明	不明	不明	23.1	16.8	7.2	1.5	なし
48	15MH1	50住	黒曜石 SP	SP	SP	SP	不明	不明	不明	20.4	16.7	6.1	2.1	なし
49	15MH1	50住	黒曜石 SP	SP	SP	SP	不明	不明	不明	28.7	13.2	6.7	1.0	なし
50	15MH1	50住	黒曜石 SP	SP	SP	SP	不明	不明	不明	23.8	27.4	11.1	4.5	なし
51	15MH1	50住	黒曜石 SP	SP	SP	SP	不明	不明	不明	15.6	30.1	7.8	3.1	なし
52	15MH1	50住	黒曜石 SP	SP	SP	SP	不明	不明	不明	25.6	9.1	2.6	1.3	なし
53	15MH1	50住	黒曜石 SP	SP	SP	SP	不明	不明	不明	23.9	21.0	10.6	3.7	なし

第4表 石段観察表

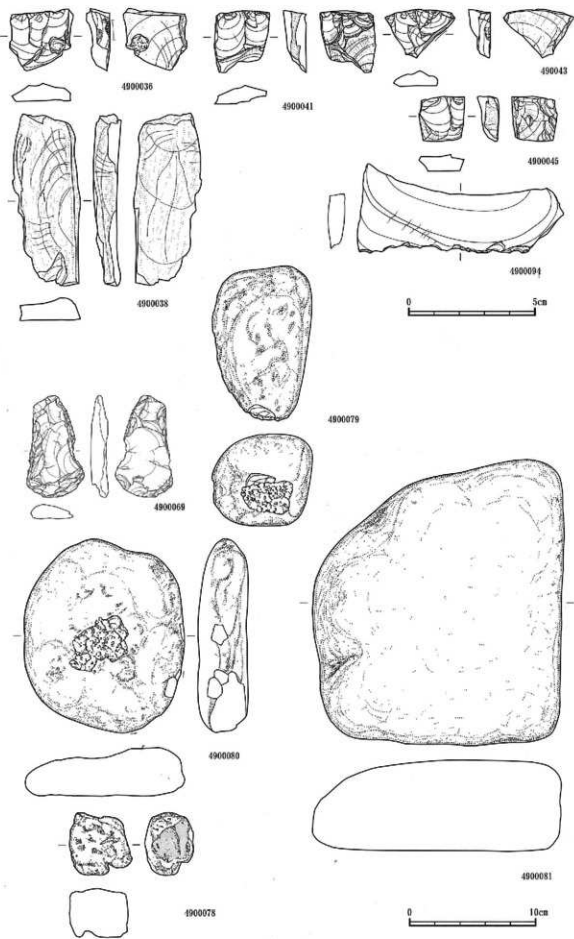


0 5cm

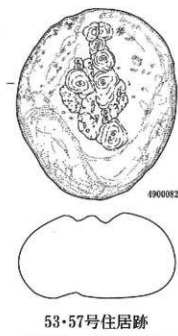
第32図 第53号住居跡出土石器 その1



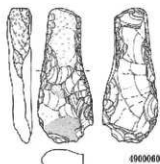
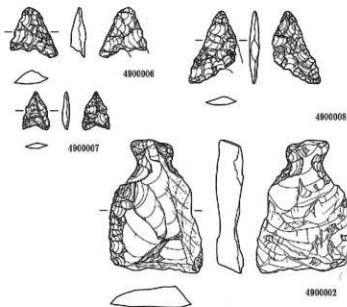
第33図 第53号住居跡出土石器 その2



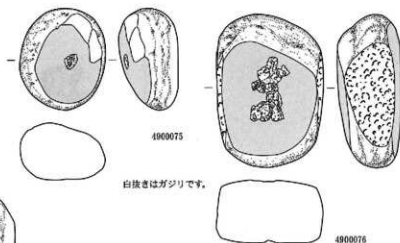
第34図 第53号住居跡出土石器 その3



53・57号住居跡

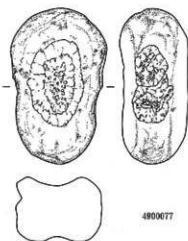


4900069



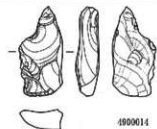
白抜きはガジリです。

4900076

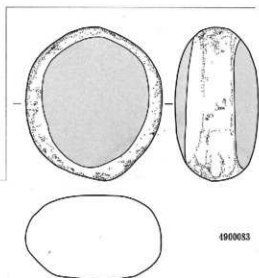


50号住居跡

4900077



4900014

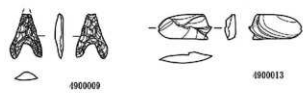
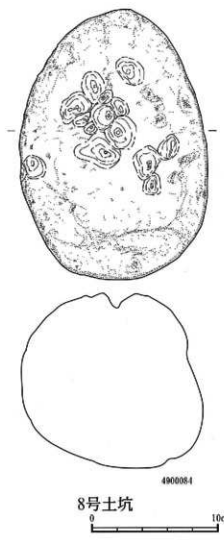


4900053

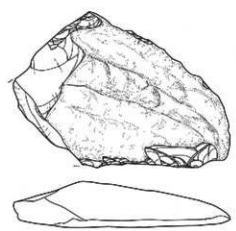
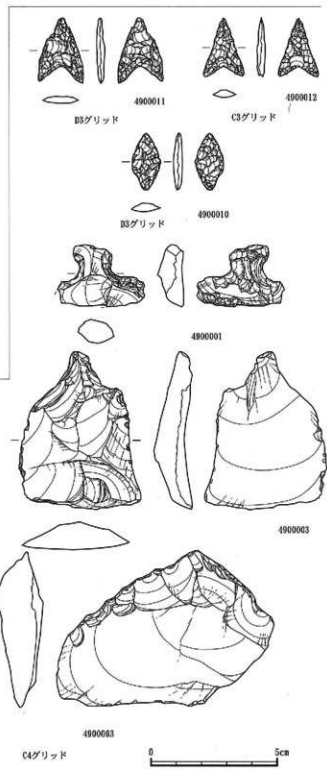
55号住居跡



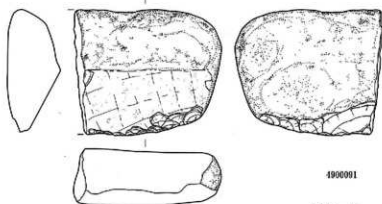
第35図 第53・57・50・55号住居跡出土石器



1号埋喪

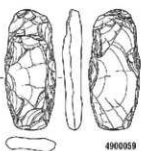


第36図 第1号埋喪・第8号土坑・遺構外出土石器 その1

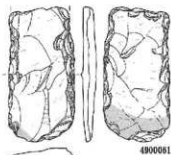


4900001

F5グリッド

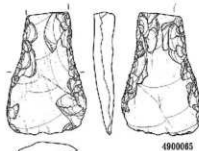


4900059



4900061

E3グリッド



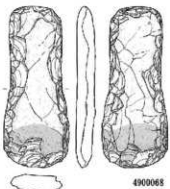
4900065

B4グリッド



4900066

B4グリッド



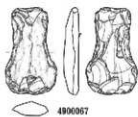
4900068

B3グリッド



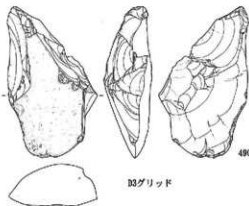
4900064

D2グリッド



4900067

C2グリッド

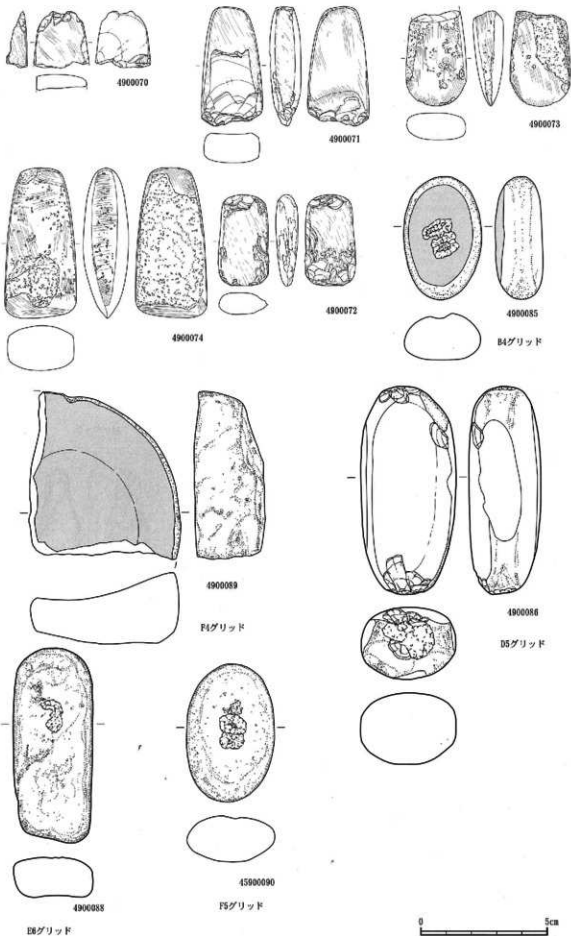


4900062

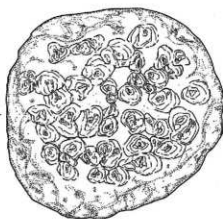
B3グリッド



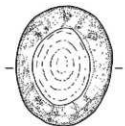
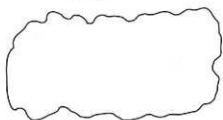
第37図 遺構外出土石器 その2



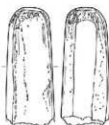
第38図 遺構外出土石器 その3



4900092



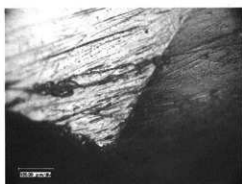
95グリッド 4900087



4900093



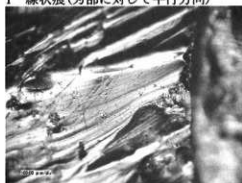
第39図 遺構外出土石器 その4



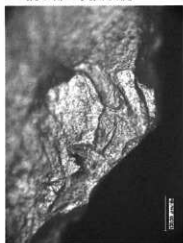
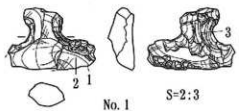
1 線状痕(刃部に対して平行方向)



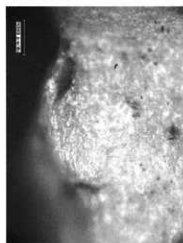
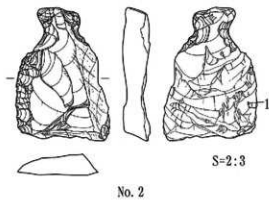
2 石器の表面



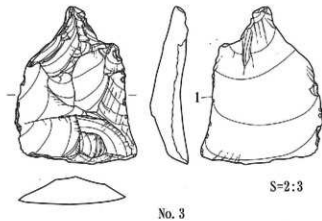
3 握み部の表面状況



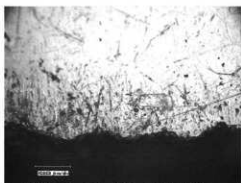
1 不明光沢



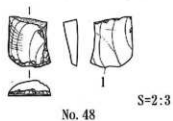
1 刃部にみられる光沢



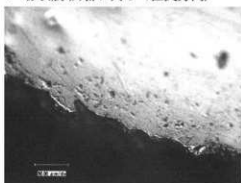
第40図 石匙の使用痕



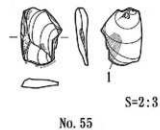
1 線状痕(刃部に対して直交方向)



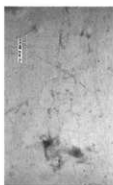
No. 48



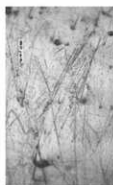
1 光沢と線状痕(刃部に対して直交方向)



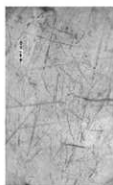
No. 55



1 石器表面



2 石器表面



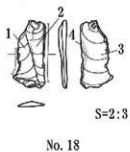
3 石器表面



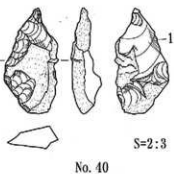
1 線状痕(刃部に対して平行方向)



4 線状痕(刃部に対して平行方向)

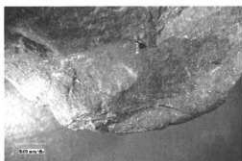


No. 18

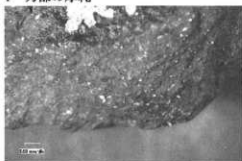


No. 40

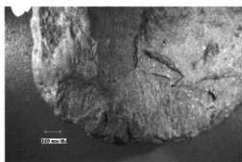
第41図 搔器と使用痕剥片の使用痕



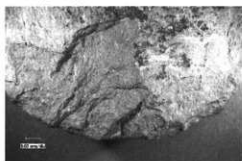
1 刃部の摩耗



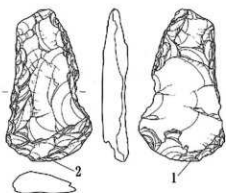
2 微小剝離痕



1 刃部の摩耗

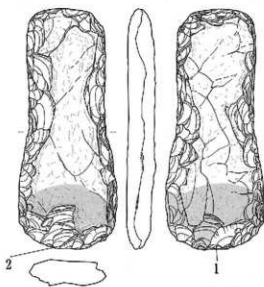


2 刃部の微小剝離痕



No. 69

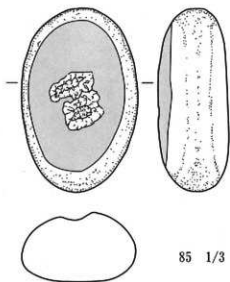
S=1:2



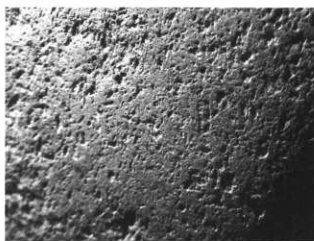
No. 68

S=1:2

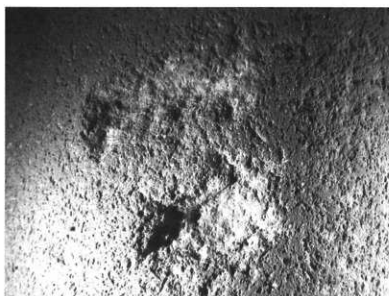
第42図 打製石斧の使用痕



85 1/3



1 磨面の拡大

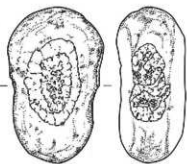


2 敲打痕の拡大



3 写真2の敲打痕の拡大

第43図 磨石+敲石の低倍率観察



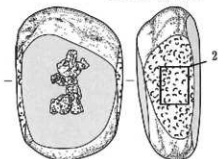
77 1/3



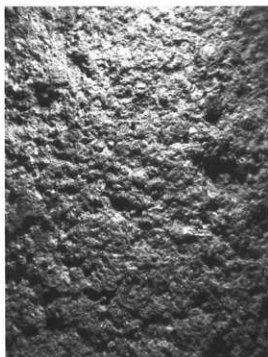
2 右側敲打痕拡大



1 正面凹痕拡大



76 1/3

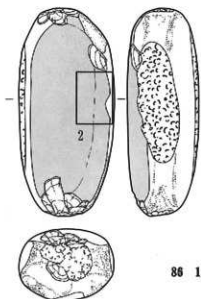


右側ザラザラの機能面



1 正面敲打痕拡大

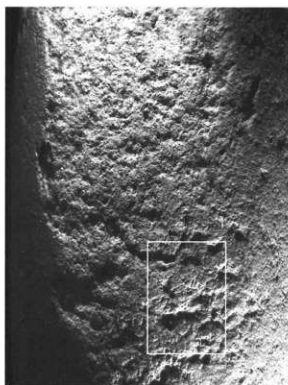
第44図 敲石、磨石+敲石の低倍率観察



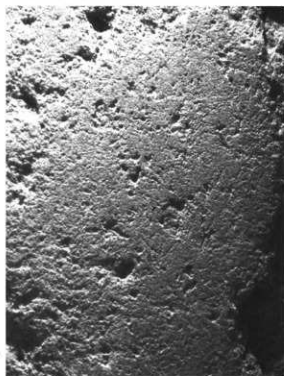
86 1/3



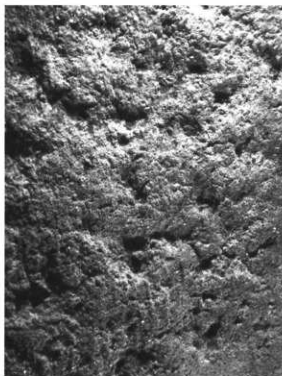
1 端部の敲打痕



3 右側面のザラザラの機能面

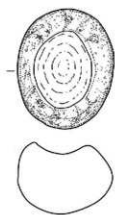


2 正面側の磨面拡大

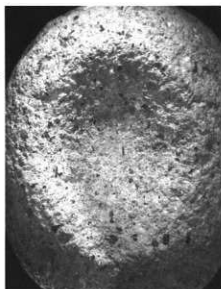


4 写真3の拡大

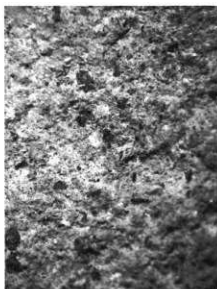
第45図 磨石+敲石の低倍率観察



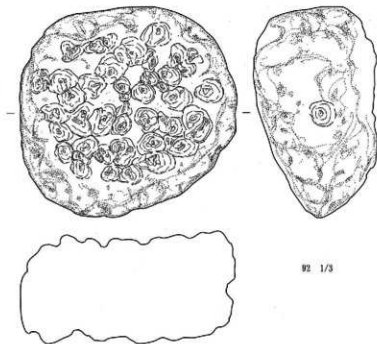
87 1/3



1 正面凹痕の拡大



2 凹痕の中央部の拡大



88 1/3

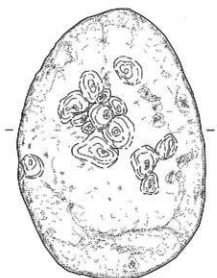


1 凹痕の拡大

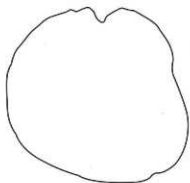


2 凹痕の拡大

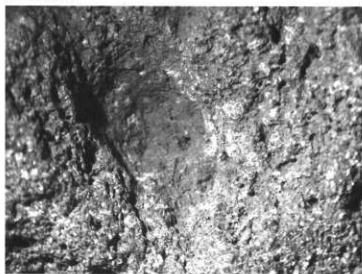
第46図 凹石・多孔石の低倍率観察



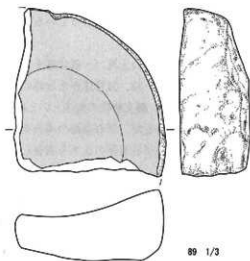
84 1/3



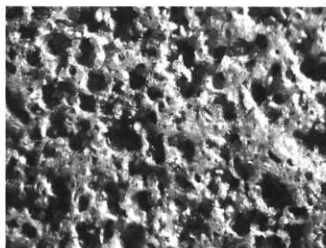
1 凹痕拡大



2 凹痕拡大



89 1/3



1 磨面拡大

第47図 凹石・多孔石の低倍率観察

第四章 総 括

平石遺跡は昭和62年度に第1次、平成元年度に第2次の調査が行われ、今回の平成14年度は第3次となる。1・2次の調査の知見と合わせて簡単にまとめた。

今回の調査で住居跡は10基、土坑が21基検出された。調査前に予想していたよりも耕作などの攪乱が深く及んでいて遺構の依存状況は良好ではなかった。そのためあつてか遺構の平面形を検出するのは非常に難しかった。調査面積871㎡で土器や石器などの出土遺物の量は未洗浄の段階で、コンテナ数にして60箱を超えるほど遺物量が多く、調査は思いのほか手間取った。遺物包含層からは数多くの鉄平石や安山岩が出土した。原位置は保っていないが、おそらくは敷石住居や石囲炉を構成していたものと思われる。以上のことを総合して考えると本来はこれ以上の数の遺構が存在していたのだろう。

遺構や遺物の密度が高いこと自体は、第1次調査で住居跡31基、第2次調査で住居跡18基が、第3次調査部分を取り囲むように検出されていて（第48図）、ここに遺構が集中することは予想されていた。

ただ、今回の調査で新たな知見も得られた。まず中期中葉の住居跡が2基（50号住、57号住）検出された。1・2次調査でも中期中葉の土器の破片は検出されていたので、当該期の遺構の存在は推定されていたが、今回はからずも中期中葉の住居跡が検出されたことになる。とくに57号住ではかなりの良好な資料が検出された。ただ、57号住の上にほぼ同じプランで53号住が切る形で作られており、遺構自体の残りはよくなかった。またそのためのなか出土土器にも年代幅がある。

11号住、51～55号住の6基は中期後葉である。中期後葉も細かく見れば、覆土から出土した遺物の量が少なく、時期が限定できなかったものもあるが、ほとんどが中期後葉のさらに後半の時期だろう。56号住と58号住が後期前葉と考えられる。後期中葉以降は遺構遺物ともなくなってしまう。

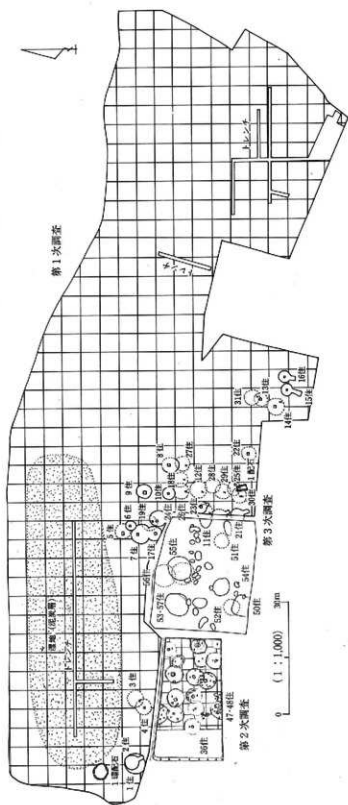
中期中葉の50号住と57号住は遺構検出面が深く、後期前葉の56号住と58号住は非常に浅かった。（中期後葉の住居跡はだいたいその中間くらいか）これらの現象はたまたまの偶然かもしれないが、時代が下がるにつれて堅穴住居を掘り下げる深さに変化したか、あるいは当時の地表面の高さが変化した可能性がないだろうか。

また、今までの調査で1基しか検出されなかった土坑が21基検出された。とくに今回の調査範囲のほぼ中央部分に2m程度の楕円形の土坑が集中している。4～6、16、19号坑は位置的にまとまっている上、長軸が北西～南東にそって向いている。これらは墓の可能性もある。これらの土坑は時期を決定できるような土器資料が得られなかったが、削平が著しいことや5号土坑が中期後葉の55号住を切っていることから後期前葉の可能性が高い。

今回の調査範囲だけでなく今までの調査の成果を合わせてみれば、これらの土坑（一部に墓を含むか）を取り巻くようにして住居跡が配置されているようにも見える。さらに50～52、54号住が土坑群の内側で、それ以外の住居跡が土坑群の外側に位置しているようにも見える。従来、縄文時代の集落といえば、外側に弧状の住居群、その内側に土坑群が配置されているように想定されているが、平石遺跡の場合その内側に住居群があるのかもしれない。ただ1～3次の調査を通じて縄文時代の平石集落の北半を調査するのにすぎず、残り半分は現在の平石集落の下に眠っているものと思われるので、遺構の配置や構成についてはわからない点が残る。

最後に、今回は煙の天地返しによって破壊される部分を緊急調査した。よって遺構検出面が深く、破壊されないものと考えられた11号、50号、54号、55号と土坑の大半は先行トレンチを設定して、遺構の性格を調べるだけにとどめ、遺構保存を図った。よって遺構の一部は保存することができた反面、その時期や性格については十分解明できず隔靴掻痒の感がある。しかし埋蔵文化財を後世に伝え、後日の検証を可能にすることは文化財保護の観点からも極めて重要なことであろう。

（文責 川崎 保）



第48図 平石遺跡第1～3次調査遺構配置図

圖 版



平石遺跡遠景



第3次調査地点航空写真

写真图版 2

1 : 11号住
2 : 50号住



3 : 51号住
4 : 51号住
烟堑



5 : 52号住
6 : 52号住
石网炉



7 : 52号住
烟堑
8 : 53号住

写真図版 3

1 : 53号住
石囲炉

2 : 53・57号
住



3 : 53・57号
住出土土
器 1

4 : 53・57号
住出土土
器 9



5 : 54号住

6 : 11号土坑
埋設土器



7 : 55号住

8 : 55・58号
住



写真図版 4

1・2：
58号住石囲炉



3：58号住
炉内土器
4：22号土坑



5：遺構外38
出土状況
6：表土剥ぎ



7：作業風景
8：発掘調査
団



写真图版 5

1 : 51号住 1

2 : 52号住 1

3 : 53·57号

住 1



4 : 53·57号

住 2

5 : 53·57号

住 3

6 : 53·57号

住 4



7 : 53·57号

住 5

8 : 53·57号

住 6

9 : 53·57号

住 7



写真図版 6

1 : 53・57号
住 8

2 : 53・57号
住 9

3 : 53・57号
住 25

4 : 11号坑 1

5 : 58号住 1

6 : 遺構外 27

7 : 遺構外 28

8 : 遺構外 29

9 : 遺構外 30



1



2



3



4



5



6



7



8



9

写真図版 7

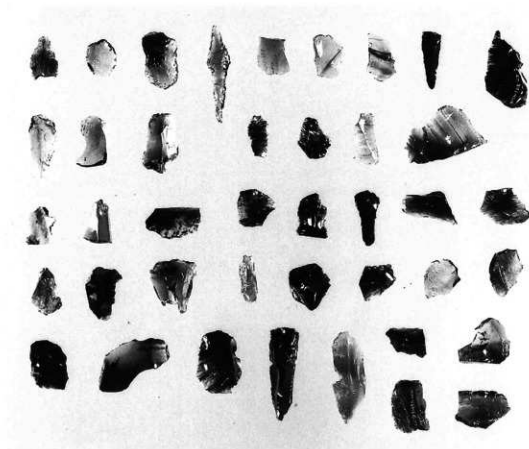
1: 遺構外31

2: 遺構外38

3: 遺構外39

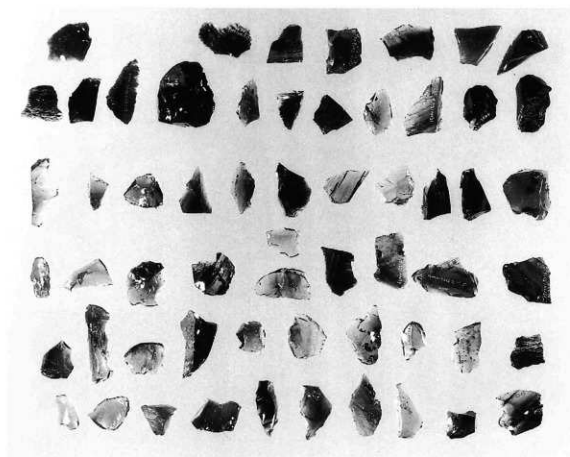


53号住
剥片石器



写真図版 8

53号住測片

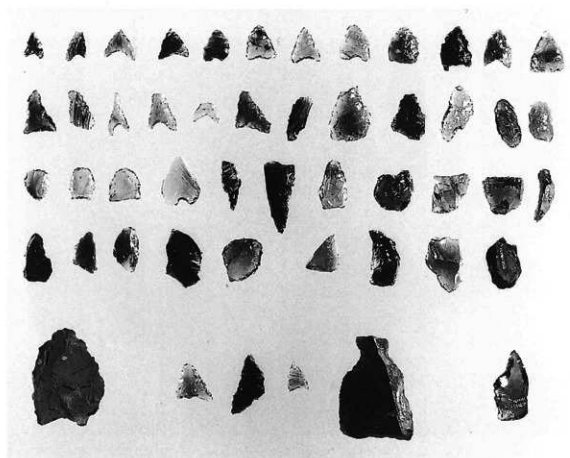


遺構外

(上4段と下段左)

50号住
(下段中央4点)

55号住
(下段右)

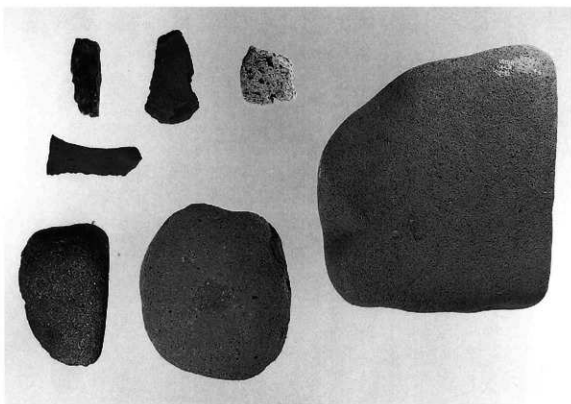


写真図版 9

遺構外
剥片、原石類

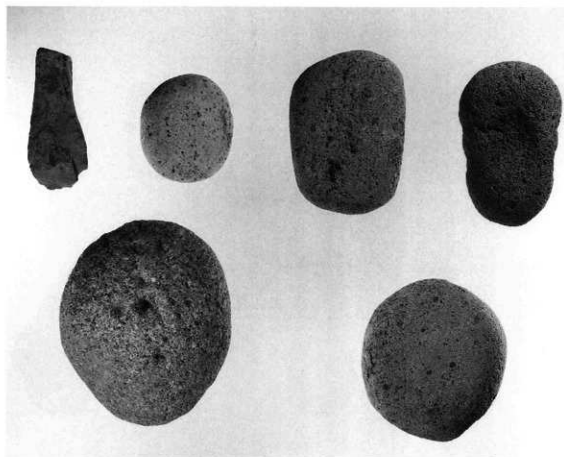


53号住
黒曜石原石
打製石斧
削器
礫石器

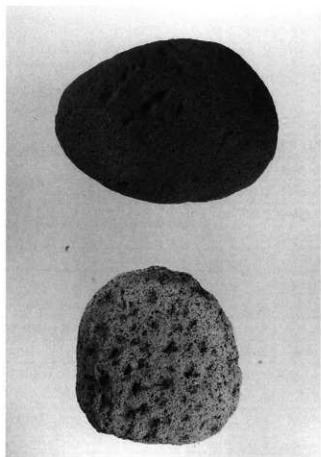


写真図版10

その他の住居
跡環石罨

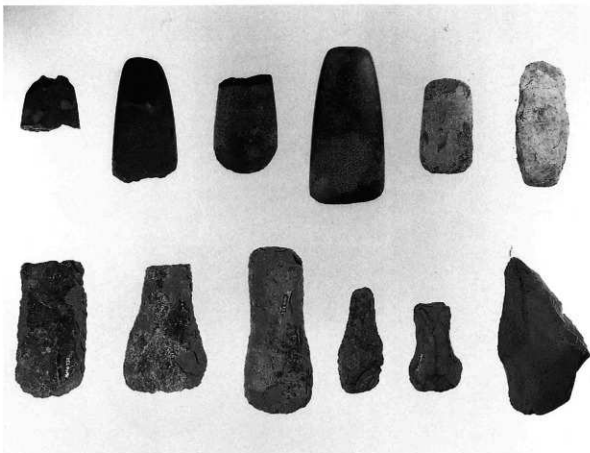


磨製石斧
打製石斧



写真図版11

礫石器



報告書抄録

書名	平石遺跡-第3次緊急発掘調査報告書-		
ふりがな	ひらいしいせき-だいさんじんきんきゅうはくつちょうさほうこくしょー		
シリーズ名	望月町文化財調査報告書	シリーズ番号	第23集
編者名	福島邦男	編集機関名	望月町教育委員会
所在地	〒384-2202 北佐久郡望月町望月263 Tel0267-53-3111		
発行年月日	2005年(平成17年)2月25日		
所収遺跡名	平石遺跡 ひらいしいせき		
所在地	望月町大字楢和字平石3142番地		
コード	市町村20322・遺跡番号78		
緯度・経度	北緯36°14'49" 東経138°19'59"		
調査期間	2003(平成15年)年9月18日~12月19日		
調査面積	871㎡		
調査原因	畑の天地返し	立地	八丁地川の河岸段丘
種別	集落	時代	縄文時代中期から後期
主な遺構	竪穴式住居跡10基 土坑22基		
主な遺物	縄文時代前期から後期の土器、土偶、土製品、石器(打製石斧、磨製石斧、石皿、磨石、凹石、敲石、石鏃、石核、剥片)		
特記事項	竪穴式住居跡が弧状(環状)にめぐる集落の中心に近い部分か。土坑の一部は墓穴の可能性がある。		

- 望月町文化財調査報告書 第1集『下吹上遺跡』(昭和53年度)
- 第2集『大飼遺跡第1次緊急発掘調査報告書』(昭和53年度)
- 第3集『大飼遺跡第2次緊急発掘調査報告書』(昭和54年度)
- 第4集『又久保遺跡緊急発掘調査報告書』(昭和55年度)
- 第5集『望月町遺跡詳細分布調査報告書』(昭和55年度)
- 第6集『尾崎第4号古墳、大塚第1号・2号古墳緊急発掘調査報告書』
(昭和55年度)
- 第7集『新水A・B遺跡』(昭和55年度)
- 第8集『金塚遺跡緊急発掘調査報告書』(昭和56年度)
- 第9集『真光寺第1号古墳緊急発掘調査報告書』(昭和57年度)
- 第10集『春日尾崎遺跡緊急発掘調査報告書』(昭和57年度)
- 第11集『後沖遺跡緊急発掘調査報告書』(昭和57年度)
- 第12集『柳久保A遺跡緊急発掘調査報告書』(昭和57年度)
- 第13集『竹之城原遺跡、浄永坊遺跡、浦谷B遺跡緊急発掘調査報告書』
(昭和58年度)
- 第14集『胡桃沢、瓜生坂A、宮久保A、布施山寺A、岩井遺跡緊急発掘調査報告書』(昭和58年度)
- 第15集『望月城跡』(昭和59年度)
- 第16集『岩清水遺跡緊急発掘調査報告書』(昭和60年度)
- 第17集『平石遺跡緊急発掘調査報告書』(昭和63年度)
- 第18集『上吹遺跡緊急発掘調査報告書』(平成元年度)
- 第19集『平石遺跡第2次緊急発掘調査報告書』(平成2年度)
- 第20集『山ノ神A遺跡、山ノ神第3・4号古墳緊急発掘調査報告書』
(平成2年度)
- 第21集『下吹上遺跡第2次緊急発掘調査報告書』(平成3年度)
- 第22集『天神城跡緊急発掘調査報告書(総括編)』(平成5年度)
- 第23集『大塚第3号古墳緊急発掘調査報告書』(平成8年度)
- 第24集『天神城跡試掘調査報告書』(平成16年度)(印刷なし)
- 第25集『平石遺跡第3次緊急発掘調査報告書』(平成16年度)

望月町文化財調査報告書 第25集

平石遺跡

— 第3次緊急発掘調査報告書 —

発行日 2005年2月25日
編集者 望月町教育委員会
発行者 望月町
望月町教育委員会
印刷 ほおずき書籍㈱
